

南東アラビア、紀元前 2 千年紀前半のワーディー・スーク期における墓制の地域性 —墓の形態と立地からの検討—

黒沼 太一*

Regional Differences in Mortuary Practices during the Wādī Sūq Period in Southeast Arabia: Tomb Morphology and Geographical Conditions in the First Half of the Second Millennium BCE.

Taichi KURONUMA

紀元前 2 千年紀前半の南東アラビアに存続したワーディー・スーク期の墓制には、埋葬様式に東西差が存在し、その背景を巡って議論がなされてきた。本稿では、この地域性の実態と背景を考察するため、近年の発見事例を含む 61 遺跡 412 例の墓を集成して新たに型式分類を実施し、各型式の地理的分布と組み合わせ関係、立地、当該遺跡の前時期からの継続性を着眼点に墓制の地域性を分析した。その結果、各着眼点からは地域色が濃い様相と南東アラビア全体に普遍的な様相の双方を確認できた。ワーディー・スーク期には南東アラビア全体で墓制上の共通の基盤が存在しており、各地の埋葬様式や墓形態の差異に見られる地域性には、この基盤を基にしつつ立地環境や集団差・移動性などの当該遺跡に特有な条件が関連していると考えられる。

キーワード：南東アラビア、ワーディー・スーク期、墓制、墓形態と埋葬様式、地域差

The study of mortuary customs during the Wādī Sūq period (ca. 2000–1600 BCE) in Southeast Arabia has revealed apparent regional differences. This paper examines tomb morphology and geographical location to clarify these regional differences in Wādī Sūq mortuary customs. A revised typology was devised through an assessment of 412 tombs from 61 cemeteries. Further analysis considered the geographical distribution par types, the assemblage of tomb types in a cemetery, geographical locations, and the continuity of site activities from the preceding Umm an-Nār period. The results indicate unevenly distributed and pan-regionally identifiable aspects of mortuary practice. This suggests that there is a common foundation to Wādī Sūq mortuary customs across Southeast Arabia. However, regional differences reflect unique local characteristics such as social group composition and activity types, topography, and environmental settings.

Keywords: Southeast Arabia, Wādī Sūq period, mortuary customs, tomb morphology and burial types, regional difference

1. はじめに

南東アラビア¹⁾ の中期青銅器時代であるワーディー・スーク (Wādī Sūq) 期 (紀元前 2000–1600 年) の墓と墓制は、先行するウンム・アン＝ナール (Umm an-Nār) 期 (紀元前 2700–2000 年) から大きく変容した (Vogt 1985: 182; Bortolini and Munoz 2015: 73; Righetti 2015: Vol. I, 75–76)。南東アラビア全域で円形の集葬墓や付随する改葬²⁾ ピットが構築されたウンム・アン＝ナール期とは異なり (Munoz 2019: 26–28; Schmidt 2020: 248)、ワーディー・スーク期には墓の外形・構造が著しく多様化した。また埋葬様式の面でも、前時期から集葬が継続した一方で (Righetti 2015: Vol. I, 75)、紀元前 3300 年ごろの新石器時代末期以来途絶えていた、一回の埋葬で完結す

る一次葬が再開した (Bortolini and Munoz 2015: 61–65, 73)。

この転換は、紀元前 2200 年ごろに端を発して継続した乾燥化が契機と考えられている (Parker et al. 2006: 473; Righetti 2015: Vol. I, 88)。これにより、当時主流だった定住的なオアシス農耕の継続と集団規模の維持が特に南東アラビア東部で困難となり、遊動的な生活への移行とともに一次葬墓の構築が再開したとされる (Bortolini and Munoz 2015: 73)。

墓の形態の多様化や墓制の変容は、1972 年のワーディー・スーク遺跡での発掘調査以来 (Frifelt 1975: 372)、各地の調査で捕捉され (Vogt 1985: 183–184; Carter 1997: 31–50; cf. 黒沼ほか 2021: 表 1)、地域差が存在することが認識されてきた (Carter 1997: 53–

表 1 分析対象遺跡の一覧

番号	遺跡名	遺跡名(アルファベット)	地域	緯度	経度	墓型式(構成型式数)	文献
1	ガリーラ	Ghalilah	北西部	25.987219	56.081973	CM1a, CM3b, IG2(3)	Donaldson 1984, 1985
2	ダーヤー	Dayā	北西部	25.875272	56.057719	CM1a, CM2a, CM2f, CM4a(4) CM1a, CM2a, CM2d, CM2g, CM3a, CM3c, CM4a, IS1a, IG2	Kästner 1990; cf. Righetti 2015 Donaldson 1984; Vogt 1998; Vogt and Franke-Vogt 1987
3	シマール	Shimāl	北西部	25.830357	56.027595	(9)	
4	カルン・アル＝ハルフ	Qarn al-Harf	北西部	25.717224	56.016853	CM4a(1)	Hilal 2005
5	アル＝ハット	Al-Khatt	北西部	25.617593	56.013072	CM3a(1)	de Cardi et al. 1994
6	ワーディー・ハッブ	Wādī Khabb	北西部	25.589	56.131	CM2g?(1)	Brass and Britton 2004
7	イデン	'dhn	北西部	25.4602	56.0057	CM2g, CP1(2)	Vogt 1998
8	アーシマ	'Ašimah	北西部	25.403778	56.151308	CM1a, CM4a, IS1a, IS1b, IS2a, IS2b, IG1(7)	Vogt 1994
9	ディバー・アル＝フジャイラ	Dibbā al-Fujairah	北西部	25.590359	56.269678	CM2c(1)	Pellegrino et al. 2019
10	ダドナー	Dadnā	北西部	25.52	56.36	CM4b(1)	Benoist and Hassan 2010
11	シャルム	Sharm	北西部	25.4687	56.3579	CM2b(1)	Riley and Petrie 1999
12	ビディヤ	Bidyah	北西部	25.435129	56.352227	CM2b, IS2b, IG1(3)	Al-Tikriti 1989b
13	キドファア	Qidfa'	北西部	25.302625	56.356262	CM4b(1)	Pfeiffer et al. 2017
14	ビトナ	Biṭnah	北西部	25.188251	56.235643	CM2e, IS1a(2)	Corboud et al. 1996
15	メレシード	Mereshīd	北西部	25.1198	56.3401	CM4b(1)	cf. Righetti 2015
16	カルバー	Kalbā'	北西部	25.08562	56.34508	CM4b(1)	Phillips 1996
17	ワーディー・アル＝ヒルウ	Wādī al-Hilo	北西部	24.991561	56.218719	IS1a(1)	Uerpmann et al. 2018
18	ワアブ	Wa'ab	北西部	24.9375	56.1591	CP3, IS2b(2)	Phillips 1997
19	ファシュガ	Fashghā	北西部	24.8875	56.1944	CM3b(1)	Phillips 1987
20	ワーディー・アル＝ザハイミ S66	Wādī al-Zahaimi S66	北西部	24.496018	56.389038	CM2, IS2(2)	Düring et al. 2019
21	モワイハート	Mowaiḥāt	北西部	25.364144	55.482172	IR2(1)	Al-Tikriti 1989a
22	ジャバル・アル＝ファヤー	Jabal al-Fāyah	北西部	25.122056	55.849721	CP3, IG3(2)	Jasim and Yusif 2018
23	ジャバル・アル＝ブハイス	Jabal al-Buḥays	北西部	25.0106	55.7971	CM2g, CM3b, CM4c, CM4d, CP3, CP4, IS1a, IS2a, IS2b(9)	Jasim 2012
24	カルン・ビント・サウード	Qarn Bint Sa'ūd	北西部	24.385183	55.718363	CM4a, CP1, CP2, IR1(4)	Vogt 1985
25	ヒーリー北	Hilī North	北西部	24.30743	55.789141	IR2(1)	Vogt 1985
26	ヒーリー	Hilī	北西部	24.288048	55.791515	CM2b, IR2(2)	Vogt 1985
27	カタラー	Qaṭṭārāh	北西部	24.259549	55.758699	CM2c(1)	Vogt 1985
28	ジャバル・ハフィート	Jabal Hafit	北西部	24.183579	55.749993	IR1(1)	Madsen 2017
29	マズィアド	Mazyad	東部	24.0334	55.8047	IG2(1)	Vogt 1985
30	クマイラ／アル＝アイン	Qumayrah / Al-Ain	東部	23.873278	56.189282	IR2(1)	Rutkowski 2020, 2021
31	ワーディー・スーク	Wādī Sūq	東部	24.389944	56.579939	IS1a, IS1b, IS2a, IS2b(4)	Frifelt 1975
32	バーティナ高速道路緊急調査 パッケージ4第5地点	Bāṭinah Express Way Package (BEWP) 4 Location 5	東部	24.2524	56.6658	IS1a, IS2a(2)	Saunders et al. 2016
33	ダフワ	Dahwa	東部	24.049563	56.694321	IS1b(1)	Williams et al. 2021
34	バーティナ高速道路緊急調査 パッケージ3第10地点	Bāṭinah Express Way Package (BEWP) 3 Location 10	東部	23.793969	57.098111	IS2a(1)	Saunders et al. 2016
35	ワーディー・スナイズル	Wādī Sunaysl	東部	23.266247	56.544757	IS1b(1)	Frifelt 1975
36	バート	Bat	東部	23.274903	56.74848	IS1a, IG1, IG3, IR2(4)	Frifelt 1975; Böhme 2012; Williams and Gregoricka 2016; Schmidt 2020; Döpper 2021b
37	コリン・アッ＝サツハイマ	Qorin as-Saḥḥaimah	東部	23.1178	56.931	IS2c, IG5(2)	Yule and Weisgerber 1996
38	ワーディー・バニフ	Wādī Banif	東部	23.636464	57.420529	IS2a(1)	Genchi and Larosa 2021
39	アル＝ジャンマ	Al-Jamma	東部	23.542377	57.517606	IS2a(1)	Genchi and Larosa 2021
40	ワーディー・グール	Wādī Ghūl	東部	23.140239	57.221899	IG5(1)	Yule 2001
41	ザンマ	Zammah	東部	23.2167	57.4062	IS1a(1)	Häser 2003
42	タヌーフ	Tanūf	東部	23.063622	57.466671	IS2c, IG4(2)	Kuronuma et al. 2021
43	イズキ	Izkī	東部	22.937899	57.758995	CM2, IS1a? IR1(3)	Schreiber 2007
44	サルート／ビシヤ	Salūt / Bisayah	東部	22.749555	57.240282	CM4d, CM4e, IS1a, IS1b, IS2a, IS2b, IG2, IR2(8) IS1a, IS1b, IS2a, IS2b, IG1, IG3	Vogt 1985; Condoluci and Degli Esposti 2015; Degli Esposti et al. 2018; Degli Esposti et al. 2021; Degli Esposti, Brandolini, & Zerboni 2021
45	アーダム北	Ādam North	東部	22.412587	57.512889	(6)	Gernez and Giraud 2017, 2019
46	アーダム南	Ādam South	東部	22.376563	57.503668	IS1a, IS1b, IS2a(3)	Gernez and Giraud 2017, 2019
47	バウシャル	Bawshar	東部	23.548	58.412	IS1a, IS2a, IS2b(3)	Costa et al. 1999; Al-Jahwari and ElMahi 2007
48	アル＝ブスターン	Al-Bustān	東部	23.5707	58.6089	IS1a(1)	Yule 2001
49	イティー	Yīṭī	東部	23.510243	58.676971	IS1a(1)	Yule and Weisgerber 1996
50	ワーディー・サルフ	Wādī Salh	東部	22.7829	58.0526	IS1a(1)	Vogt 1985
51	アル＝アフダル	Al-'Akhḍar / Khudra	東部	22.846206	58.178748	IS1a(1)	Yule and Weisgerber 2015b
52	サマド・アッ＝シャーン	Samad ash-Shān	東部	22.794567	58.144686	IS1a, IS1b, IS2b, IG2, IG3(5)	Yule 2001
53	リズク	Lizq	東部	22.7076	58.1709	IS1a(1)	Döpper 2021a
54	アル＝ハシュバ	Al-Khashbah	東部	22.660587	58.013937	CM2, IS2a, IS2c(3)	Schmidt and Walter 2021
55	ブーウェイテン	Būweīten	東部	22.61	58.03	IS1b(1)	Döpper 2021a
56	ムフトウル	Mukhtu	東部	22.663026	57.994777	IS1b(1)	Döpper 2021a
57	アル＝ワフィー	Al-Wafī	東部	22.6	57.98	IS1b(1)	Döpper 2021a
58	アル＝スダイラ	Al-Sudairah	東部	22.5698	58.0132	IS1b(1)	Döpper 2021a
59	シナーウ	Sināw	東部	22.3565	58.0442	IR1(1)	Tosi and Saccone 2014
60	アル＝バティーン	Al-Baṭīn	東部	22.784996	58.671141	IS1b(1)	Yule 2001
61	サフラト・アル＝ハドリ	Sachrut al-Hadrī	東部	20.609215	58.880002	IG3(1)	Weisgerber and Al-Shanfari 2013

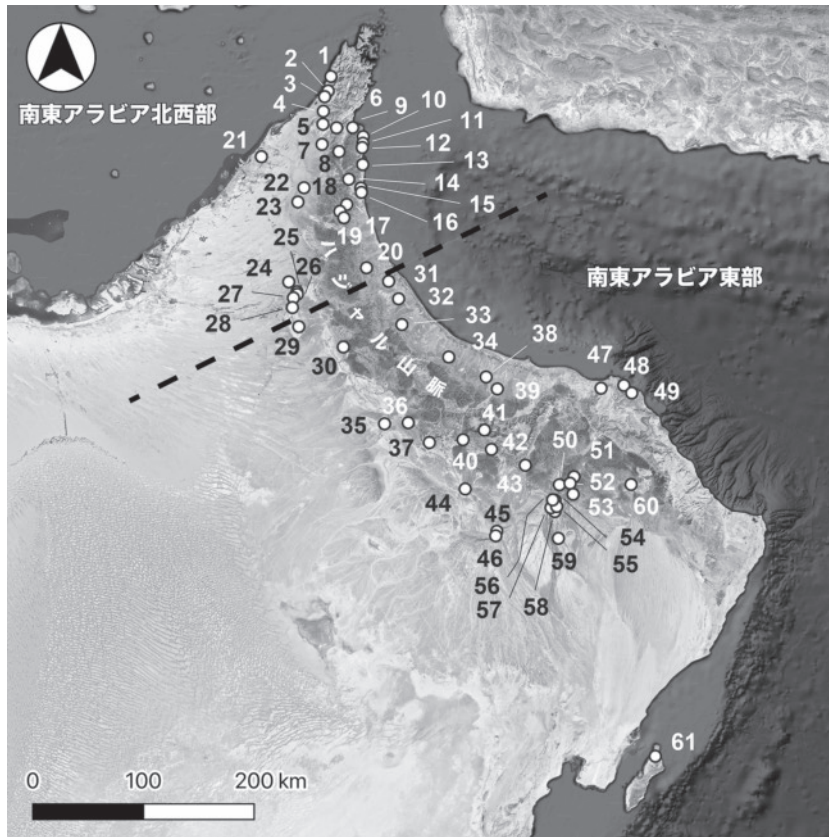


図1 本稿で言及するワーディー・スーク期遺跡の分布。図中番号は表1中の番号と対応。Google マップ衛星写真を背景地図に使用し、QGIS により作成。

55; Righetti 2015: Vol. I, 122)。すなわち、オマーン湾岸沿いの今日の都市ソハール (Suḥār) および内陸部の都市であるアル＝アイン (Al-Ain) を結ぶ直線 (図1) を仮に設け、その北西側を南東アラビア北西部、同東側を南東アラビア東部と呼称すると³⁾、墓制は集葬主体の北西部と一次葬がほとんどの東部に区分できる (cf. Righetti 2015: Vol. I, 193; 黒沼ほか 2021: 149)。

しかし近年、南東アラビア東部に位置するサルート／ビシヤ (Salūt/Bisyah) 遺跡 (Condoluci and Degli Esposti 2015: Pl. 4; Degli Esposti et al. 2018: 195; Degli Esposti, Brandolini et al. 2021: 217-219; Degli Esposti, Spano et al. 2021: 80) やアル＝ハシュバ (Al-Khashbah) 遺跡 (Schmidt and Walter 2021: 113-115)、イズキ (Izki) 遺跡 (Schreiber 2007: 132-133) で集葬墓と見られる事例が発見された。特にサルート／ビシヤ遺跡の集葬墓群は、東部では初めて発掘調査により確認された事例となる。S. ドゥパー (Döpper) は、アル＝ハシュバ遺跡を含むオマーン北部中央地域でこれまで発見されたワーディー・スーク期の証拠を考察し、南東アラビア東部にもより多くの集葬墓型の墓が存在する潜在的な可能性を指摘した (Döpper 2021a: 323)。また、東部の

確実な集葬墓事例が発見される以前にワーディー・スーク期の社会を検討した S. リゲティ (Righetti) も、単に埋葬様式の違いから墓制の東西差を論じるのではなく、立地や遺物など多面的視点から総体的に墓制を捉え直す必要性に言及している (Righetti 2015: Vol. I, 75-116)。現在のところ、上記した集葬墓を除き、南東アラビア東部で一次葬墓が大部分を占める状況に変化はない。しかし、近年の東部での集葬墓の発見は、墓制の違いを文化的な東西差として捉えるのではなく、立地環境などの視点を考慮に入れて、複合的に捉え直す必要性を喚起している。つまり、集葬墓と一次葬墓がそれぞれ造営されうる条件を求め直し、なぜ南東アラビアの東西で造営される墓の種類ひいては墓制に差異が生じているのか、再検討が必要である。

筆者はこれまでおよそ170箇所の遺跡におけるワーディー・スーク期の物質文化に関する情報を集成し (黒沼 2022)、遺物の点では出土コンテクストの違いを除いて、南東アラビア全域で出土種類や組成に大きな地域的差異は認められないことを確認した (黒沼ほか 2021: 158)。その一方、遺跡の種類や活動内容の地域的な偏在も確認できた。例えば、居住・活動形態については、ウンム・アン＝ナール期の円形墓壇を利用した石造建築事例、新たに構築した石造・日乾レン

が建築、貝塚、洞穴、工房など多様な活動が偏在することを確認した（黒沼ほか 2021: 150-152）。

こうした居住・活動形態は、当該地の地形や資源分布、先行する遺跡の存否などの条件に大きく規定されている。ここから、墓地の所在地や規模、そこで発見される墓の形態や埋葬様式なども、同様に立地環境条件の影響を受けている可能性が想定できる。特に所在地については、UAE ラス・アル＝ハイマ（Rā's al-Khaymah）首長国北部では、5-20 km の間隔でシマール（Shimāl）などの墓地遺跡がハジャール（Hajar）山脈沿いに点在していることから古代の交通路との関連性が言及されている（Vogt 1998: 275）。またリゲティは、ワーディー・スーク期の遺跡分布を総体的に検討し、この時期の遺跡分布は、乾燥化との関連で水資源の利用可能性および当時の交通路と密接に関わっており、この両条件に恵まれた場所には遺跡が存在する可能性が高いことを示している（Righetti 2015: Vol. I, 195-196）。C. フェルデ（Velde）は、乾燥化の開始後も降水量が相対的に豊富だった南東アラビア北西部では、ウンム・アン＝ナール期の活動痕跡が認められるオアシスでワーディー・スーク期にも定住的なオアシス農耕と集葬を基盤とする活動が維持されていたことを指摘し、人類活動と水資源との関係性を述べた（Velde 2009: 70）。またドゥパーも、南東アラビア東部であっても水資源が得やすい場所であれば、定住的なオアシス農耕が維持されていた可能性を述べている（Döpper 2021a: 322）。集葬墓の造営と定住的なオアシス集落の連関性を考慮すると、これらの提起は、ワーディー・スーク期墓制の地域性の検討に、環境的側面を考慮する必要性を示しており、これまで述べられてきた墓制の東西差を再考する上で重要である。しかしながら、リゲティの研究には近年発見された東部の集葬墓を含む新規の発見事例が反映されていない。また、フェルデやドゥパーの研究では南東アラビア全体を俯瞰的に再考する視点が不十分である。ここから、先行研究を基盤としつつ、新たな資料を加えた再検討を実施し、ワーディー・スーク期墓制の地域性を捉え直す必要が生じている。

したがって、本稿ではワーディー・スーク期墓制に地域性が生じた要因を、立地環境条件を踏まえて捉え直し、墓に関する公開情報の悉皆的な収集と新たに構築した墓型式の分類体系に準拠した分布状況の把握と分析、地形や先行遺跡との関係性から検討する。

2. ワーディー・スーク期墓の型式分類に関する研究史

ワーディー・スーク期の墓は、集葬または一次葬を前提としつつ、多様な構造・形態が存在しており、墓制の地域性を把握するためには、形態的な特徴を整理

する必要がある。そこで本節では、地域性の検討に先立ち、ワーディー・スーク期墓の分類や型式化に関わる先行研究を概括し、問題点を提示する。

これまで、ワーディー・スーク期の墓は建築構造上の特徴に基づいて、いくつかの型式案が提示されてきた。しかし、一部の例外を除いて一定の基準による統一的な分類ではなく、新出例の追加による型式化が続いていたため、型式名は遺跡名や遺跡が所在する地名を基にしていた。初期にワーディー・スーク期の墓を概括した B. フォークト（Vogt）は、既存墓再利用埋葬、集葬、一回性の単複葬の 3 種類の埋葬様式の違いに着眼して、それまで発見された事例を記述した（Vogt 1985: 183-215）⁴⁾。この中でフォークトは、前期青銅器時代前半のハフィート（Ḥafit）期（紀元前 3300-2700 年）ケルン墓や同後半のウンム・アン＝ナール期円形墓の再利用例を紹介するとともに、外形が長楕円のシマール（Shimāl）型や楕円形の墓室中央に間仕切り壁を有するガリーラ（Ghalilah）型などの集葬墓を示した。さらに一回性の単複葬の事例として円形の外形を持つマシーラ（Maṣīrah）型や石組墓室（シスト）墓についても言及するなど包括的に事例を紹介し、合計で 11 種類に墓を分類して、南東アラビアの北西部と東部における墓制の差異を示唆した（Vogt 1985）⁵⁾。

こうした遺跡名や地名を基にした分類は、R. カーター（Carter）や P. ユール（Yule）らにより、近年まで改訂されつつ用いられてきた⁶⁾。カーターは（Carter 1997）、フォークトの示した枠組みを引き継ぎつつ、キドファア（Qidfa'）遺跡やビトナ（Bithnah）遺跡などでの新出例や、後期青銅器時代の事例を含め合計で 17 の型式を定義した。またユールは、南東アラビア東部におけるワーディー・スーク期からサマド（Samad）後期鉄器時代（およそ紀元前 150/100- 紀元後 300 年）の墓を対象にした型式分類の中で、フォークトによって言及されたマシーラ型などを受け継ぎつつ、自身の調査で発見したグール（Ghul）型およびコリン・アッ＝サッハイマ（Qorin as-Saḥḥaimah）型を新たにワーディー・スーク期の墓型式として付け加えた（Yule et al. 1993: 399-402; Yule 2001: 45; Yule and Weisgerber 2015a, 2015b）。

しかし、これらの分類案は、ワーディー・スーク期墓の多様な形態を把握することに貢献したものの、新規の発見例を逐次追加しつつ型式化したため、個々の型式の差別化と比較を困難にし、体系的で一貫性を有する分類案の構築を難しくさせる問題点を抱えていた。

また型式名が地名に基づくため、命名地以外での分布を把握することが難しくなる可能性も生じた。さらに必ずしも分類案間の対応関係が明示的でないことも問題であった。

表2 ワーディー・スーク期墓の改訂版型式分類 (Righetti 2015: Vol. 2, Ill. 14 を改訂)

型式	埋葬様式	墓室数	墓室	墓室および付属構造の詳細	備考
CM1a	集葬	単数	円形	地上	-
CM2a			長方形	地上・楕円形	-
CM2b				半地下・長方形・幅狭	-
CM2c				地下・長方形	-
CM2d				地上・長方形・小型	-
CM2e				半地下・長方形・狭道	-
CM2f				半地下・長方形・幅狭・副墓室	-
CM2g				地下・長方形・小型	-
CM3a			隅丸長方形	CM2a型を囲む墓室	-
CM3b				墓室内中央に1枚の分離壁	-
CM3c				墓室内中央に2枚の分離壁	-
CM4a		馬蹄型		地上・円形または楕円形・墓室中央に1枚の分離壁	-
CM4b				地下・長方形・墓室中央に1枚の分離壁	-
CM4c				地下・円形・墓室中央に1枚の分離壁	-
CM4d				地下・円形・掘り込みによるU字型の墓室	-
CM4e				半地下・不整形な長方形・墓室中央に1枚の分離壁	新規追加
CP1		複数	地上・円形または楕円形・3-4対の墓室	-	-
CP2			地上・長方形・2つの連接墓室	-	-
CP3			地下・隅丸長方形または楕円形・平行配置された3-4の墓室	-	-
CP4			地下・円形・4つの墓室(クローバー形)	-	-
型式	埋葬様式	墓室位置	墓室	墓室および付属構造の詳細	備考
IS1a	一次葬	地下式	石室・上部構造なし	環状周壁なし	-
IS1b				一重環状周壁	-
IS1c				多重環状周壁	新規追加
IS2a			石室・上部構造あり	塚状・3-4列の付属壁	-
IS2b				二列壁および環状周壁	-
IS2c				環状周壁なし	新規追加
IG1		地上式	半円形頭端・周壁あり	-	-
IG2			一列の石壁による長方形	-	-
IG3			一列の石壁による円形	-	-
IG4			楕円形、石室側面の一部に天然の巨岩を転用	-	新規追加
IG5			円形	-	新規追加
IR1		転用	ハフィート期墓転用	-	新規追加
IR2			ウンム・アン＝ナール期墓転用	-	新規追加

この中で近年、ワーディー・スーク期墓の分類案として初めて一貫した基準に基づいた事例がリゲティによって提示された (Righetti 2015: Vol. I, 126-127, Vol. II, 19-20)。この分類の特色は各型式のコード化であり、リゲティは最大で4つの分類基準を設けて各基準にコードを付すことで、型式番号が形成される仕組みを構築した。この試みにより体系的な分類が実現し、後期青銅器時代の墓型式も含めて合計で27型式が規定された。リゲティはこの分類案に基づいて各型式の分布を調べ、結果を可視化した (Righetti 2015: Vol. I, 126-127)。本分類案は体系性と明確な型式の定義、拡張性を有しているために後続研究でも採用され (Döpper 2021a: Table 1)、本研究にも活用できる。しかし、リゲティの分類には公表時点で発見されていた全ての事例が組み込まれているわけではない。また新たに発見された資料も加味されていない。そこで本研究では、リゲティによる型式分類を基本に、これまで未検討の事例を含め、新型式を追加して地域性のあり方を理解することを試みる。

3. 資料と方法

(1) 分析対象

ワーディー・スーク期墓の地域性を把握するため、本稿では南東アラビア全域に分布する61遺跡から発見された412基の墓を対象とした (図1、表1)。これまで筆者は125箇所のワーディー・スーク期の墓地遺

跡を確認しているが (cf. 黒沼ほか 2021: 表1)、本稿では、平面図または写真で構造を把握できる墓、および報告者の記載から時期を判別可能な事例に限って検討の対象とした。ただし再利用例については、墓の構造から判断することが不可能なため、ワーディー・スーク期の埋葬の存在や遺物の出土に関する言及を条件に検討の対象に加えた。この条件に適合する最新の事例についても可能な限り検討の対象に含め、過去の調査で報告されたにも関わらずリゲティの集成に未収録の事例も追加した。

(2) 墓型式分類案の構築

本稿では、リゲティの分類 (Righetti 2015: Vol. I, 126-127, Vol. II, 19-20) を核とした改訂版の墓型式分類案を構築する。これを基に各型式の地理的分布と地域性を看取する。

リゲティによる型式分類案は、最大4つの分類基準で成立している (表2)。まず第1基準では埋葬様式をもとに、個人葬または集葬により墓型式が大別される⁷⁾。第2基準以降は個人葬墓または集葬墓で基準が分かれる。

個人葬墓については、第2基準に地表面に対する墓室の位置が、第3基準に墓室および付属構造が設定され、第2基準で地下式とした型式には第4基準を付加して墓室の周囲に設けられた付属周壁の構造をもとに細分類が規定された。

集葬墓については、第2基準として墓室が単数か複

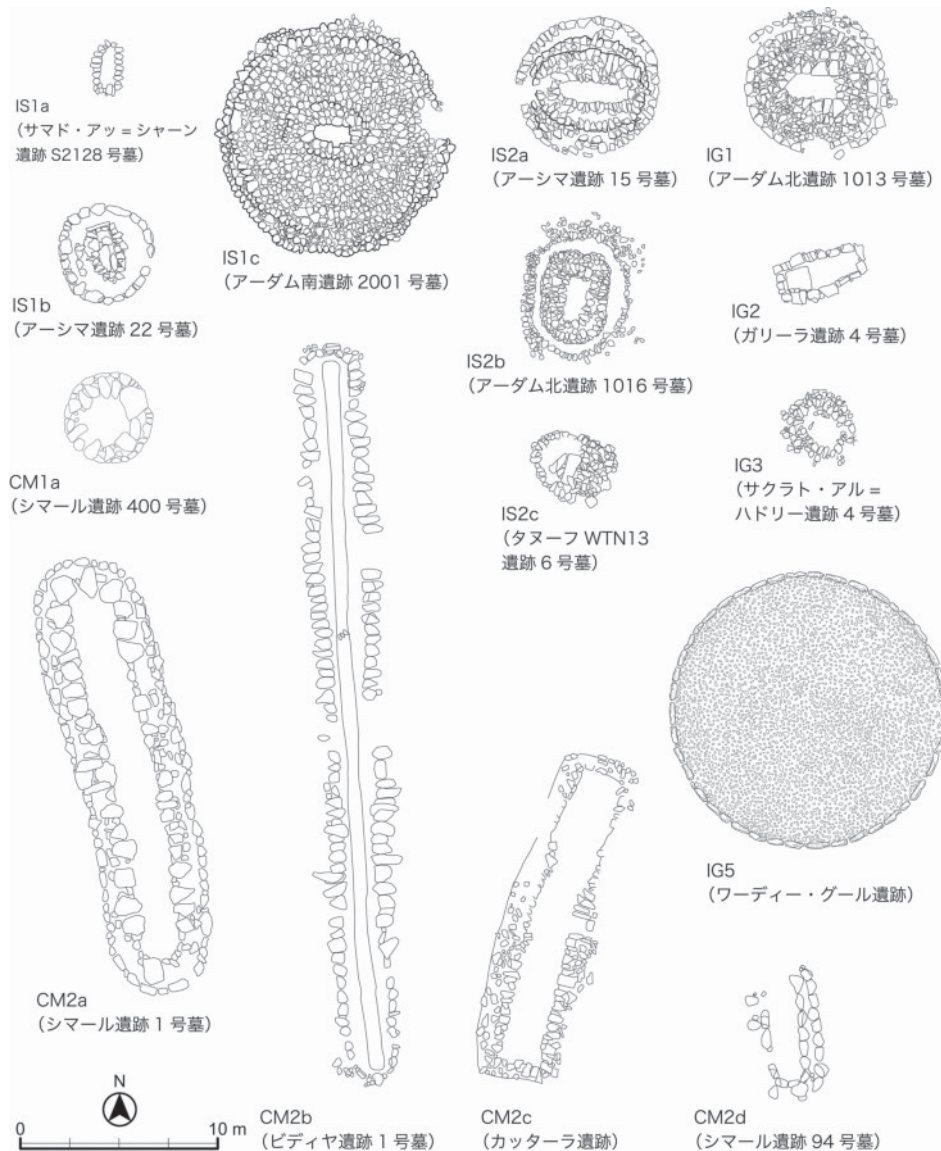


図2 ワーディー・スーク期墓の平面図その1。型式名は各例左側に提示。以下の出典を元に作成。IS1a: Yule 2001: Taf. 273. IS1b: Vogt 1994: Fig. 31. IS1c: Gernez 2016: Fig. 16. IS2a: Vogt 1994: Fig. 21. IS2b: Righetti 2015: Vol. III, Fig. 536. IS2c: Kuronuma et al. 2021: Fig. 15. IG1: Gernez and Giraud 2017: Fig. 6. 22. IG2: Donaldson 1985: Fig. 1. IG3: Weisgerber and Al-Shanfari 2013: Fig. 41. IG5: Yule 2001: Taf. 543. CM1a: Kästner et al. 1989: Fig. 7. CM2a: Donaldson 1984: Fig. 2. CM2b: Al-Tikriti 1989b: Pl. 62. CM2c: Vogt 1985: Taf. 86. CM2d: Righetti 2015: Vol. III, Fig. 46.

数かで二分し、単室の場合には第3基準として墓室の外形を、第4基準として地表面に対する墓の位置や墓全体の外形に基づいた分類が提案された。当該墓が複数の墓室を持つ場合は、第3基準に地表面に対する墓の位置や墓全体の外形が分類の基準となり、第4基準は設けられていない。

この型式分類案は体系的だが、下記の点で改訂を要する。まず、フォークトが取り扱った前期青銅器時代墓の再利用例 (Vogt 1985: 185-186) が含まれていない。次に、オマーン東部の集葬墓など、リゲティによ

る検討後に発見・再評価された事例も組み込まれていない。第3に、初期に規定された型式の中に、リゲティ分類との対応関係が不明瞭な事例がある。

そこで本稿では、リゲティ分類に必要であれば新型式を追加で設定し、分類案の改訂を試みた。新規に設定する場合は、リゲティの方式に準じて型式名を設定した。特に前期青銅器時代墓の再利用例には、個人墓分類の第2基準に「転用」を設けた。筆者は過去に改訂版案を示しているが (黒沼ほか 2021: 表2)、本稿では再改訂して33型式に分類した (図2-3、表2)。

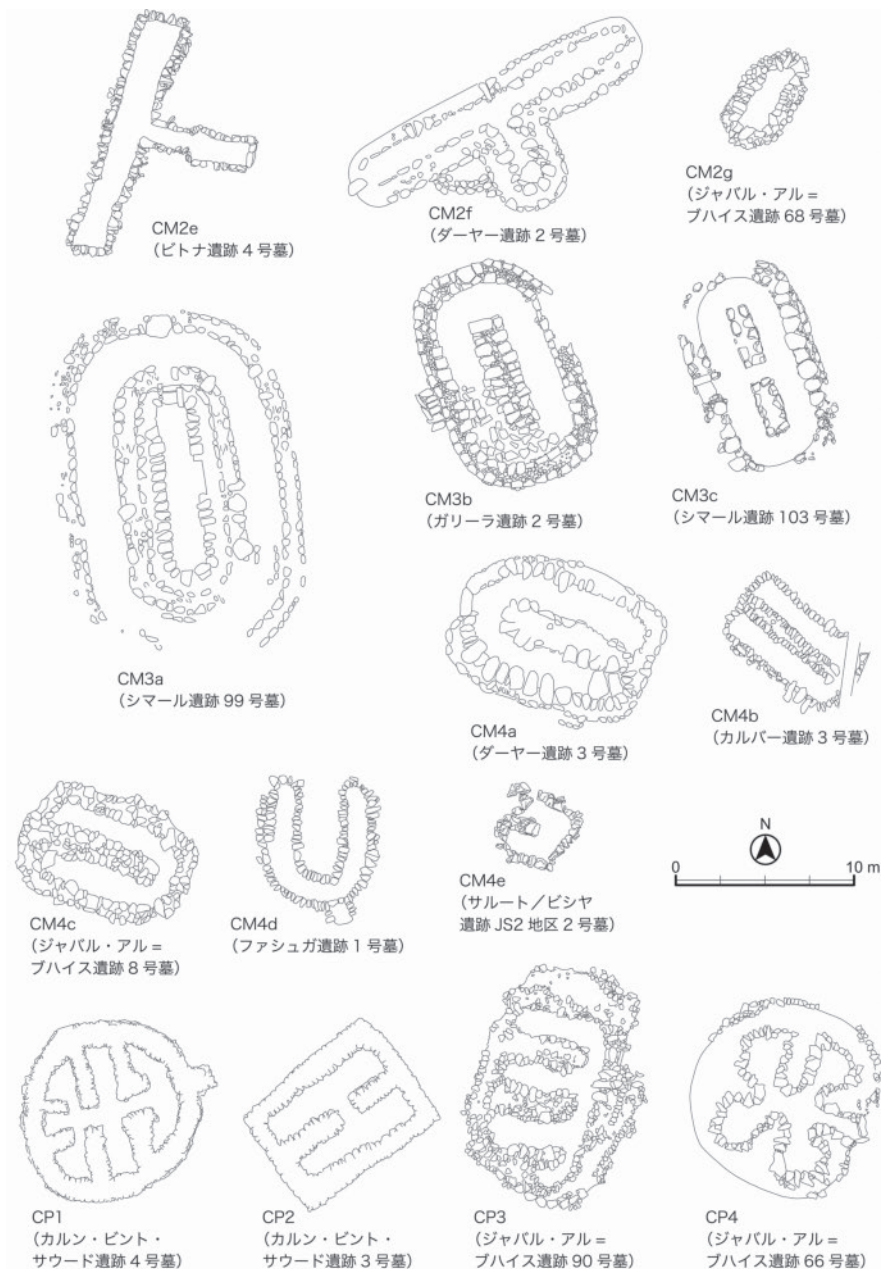


図3 ワーディー・スーク期墓の平面図その2。型式名は各例左側に提示。以下の出典を元に作成。CM2e: Corboud et al. 1996: Fig. 16. CM2f: Kästner 1990: Abb. 4. CM2g: Jasim 2012: Fig. 227. CM3a: Righetti 2015: Vol. III, Fig. 55. CM3b: Donaldson 1984: Fig. 16. CM3c: Vogt and Franke-Vogt 1987: Fig. 22. CM4a: Kästner et al. 1989: Fig. 3. CM4b: Phillips 1996: Fig. 7. CM4c: Jasim 2012: Fig. 49. CM4d: Phillips 1987: Fig. 5. CM4e: Condoluci and Degli Esposti 2015: Pl. 4. CP1: Vogt 1985: Taf. 78. CP2: Vogt 1985: Taf. 80. CP3: Jasim 2012: Fig. 333. CP4: Jasim 2012: Fig. 210.

このうち、新設定の型式は6種類となる⁸⁾。

以下では、各型式に言及する場合に、コード名に「型」を加えた呼称を用いる。例えば、CM2b型、IS1b型などが型式名の使用例となる。中分類で取り扱う場合は、「系統」の呼称を用いる。例えば、第4基準まで細分類がある型式は、第3基準までのコードに「系統」を加え、CM2系統、IS2系統などと呼称

する。また第3基準までのコードのみの型式については、第2基準までのコードに「系統」を加え、CP系統、IG系統などと呼称する。

4. 分析

以下では、3(2)で定めた墓型式の分類に基づいて、

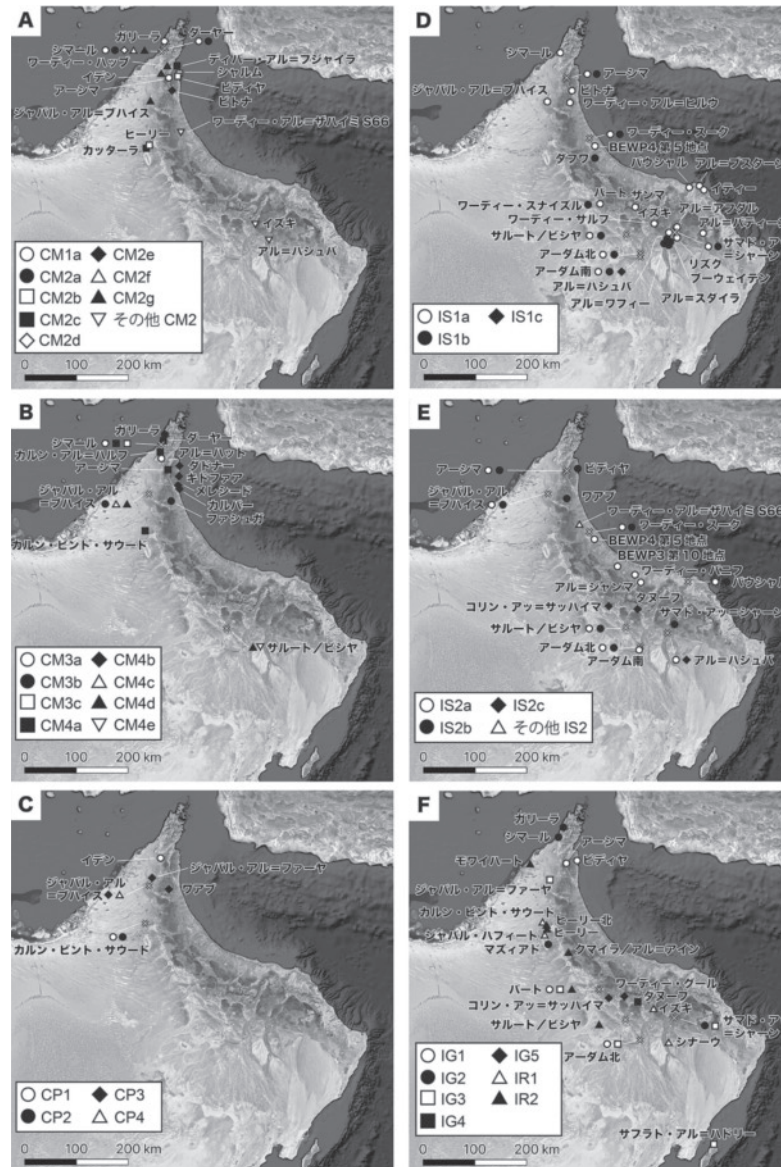


図4 各墓型式の分布 (A: CM1 および CM2 系統、B: CM3 および CM4 系統、C: CP 系統、D: IS1 系統、E: IS2 系統、F: IG および IR 系統)。BEWP はパーティナ高速道路緊急調査パッケージの略称。Google マップ衛星写真を背景地図に使用し、QGIS により作成。

各型式の地理的分布、各型式の組み合わせ関係、立地地形、およびウンム・アン＝ナール期遺跡との埋葬様式の関係性に関する分析の結果を提示する。

(1) 各墓型式の地理的分布

上記で定義した分類に基づいて墓型式の分布を確認したところ、南東アラビア全体に分布する事例と、局所的な部分にとどまる事例の両方を看取することができた。

集葬墓型式の分布

集葬墓のうち、1 遺跡のみで確認できた局所的な事例には、CM2d、CM2e、CM2f、CM3c、CM4c、CM4e、CP2、CP4 の各型式が該当する。このうち、

CM2d 型と CM3c 型はシマール遺跡でのみ確認できた (図 4A-B)。また CM2e 型はビトナ遺跡、CM2f 型はダーヤー (Dāyā) 遺跡 (図 4A)、CM4e 型はサルート／ビシヤ遺跡 JS2 地区 (図 4B)、CP2 型はカルン・ビント・サウード (Qarn Bint Sa'ūd) 遺跡でのみ確認できたほか (図 4C)、残る CM4c 型と CP4 型はジャバル・アル＝ブハイス (Jabal al-Buḥays) 遺跡にのみ存在することが読み取れた (図 4B-C)。これらのうち、サルート／ビシヤ遺跡は南東アラビア東部に位置し、分布地が大きく離れており、地域色が濃い型式と捉えられる。

次に、15 km 以下の範囲に分布状況が認められた型式として、CM2a 型が挙げられる。CM2a 型が発見

された遺跡は、シマールとダーヤーのみであり、両遺跡は9 km 弱と近接するため、狭い範囲に分布が偏る点が読み取れる（図4A）。

CM2a 型よりもやや離れた位置関係で近接する型式としてはCM3a 型がある。本型式はシマール遺跡とアル＝ハット（Al-Khatt）遺跡でのみ発見されており、両遺跡の相対的な距離は概ね25 km 程度であるため（図4B）、南東アラビア北西部のなかでも北部の一部地域に限定的なことが明らかである。

また、南東アラビア北西部のオマーン湾側でのみ確認できた事例としてCM4b 型を確認できた。本型式はダドナー（Dadnā）、キドファア（Qidfa'）、メレシード（Mereshid）、およびカルバー（Kalbā'）の各遺跡で発見されている（図4B）。これらの遺跡は南北に55 km ほどの範囲に分布しており、メレシードとカルバーは概ね3 km 強と近接する。

さらに、ある程度の地域色を有しつつ離れた場所でも同型式が認められる事例として、CM2b 型とCP3 型がある。CM2b 型はCM4b 型同様にオマーン湾に面した分布を基本とし、シャルム（Sharm）遺跡およびビディヤ（Bidyah）遺跡で確認できた（図4A）。両遺跡は4 km 程度の範囲に近接する点が特徴である。ただし、本型式はヒーリー（Hili）遺跡においても確認されており、CM4b 型のような分布状況は示さない。また、CP3 型は概ね14 km 程度で隣接するジャバル・アル＝ブハイスおよびジャバル・アル＝ファヤ（Jabal al-Fāyah）の両遺跡で発見されているが、両遺跡から遠隔のワアブ（Wa'ab）遺跡にも本型式が存在するため（図4C）、CM2a 型ほどには地域色を示さない。

残るCM1a、CM2c、CM2g、CM3b、CM4a、CM4d、CP1、CP3の各型式は南東アラビアの北西部の各所に分散しており、分布の集中を読み取ることができない（図4A-C）。特にCM4d 型については、南東アラビア東部のサルート／ビシヤ遺跡JS4 地点でも確認できており、例外的な分布である（図4B）。なお、細分が不可能なCM2 系統が存在する遺跡のうち、イズキおよびアル＝ハシュバは南東アラビア東部に所在する事例である。

以上から、集葬墓には広範囲に分布する型式と、特定の遺跡にのみ存在する型式の両方が確認できた。さらに、地域性を想定可能な一定の地理的な範囲に限定される型式もあり、特に南東アラビア北西部のハジャル山脈を挟んだ分布差を確認できた。すなわち、ハジャル山脈より西側に分布するCM2a 型およびCM3a 型と、同東側に分布するCM4 型である。事例が1 遺跡のみに限定される局所的な事例のうち、ハジャル山脈山中の沖積地に位置するビトナ遺跡のCM2e 型と南東アラビア東部のサルートに所在するCM4e 型を除いた、CM2d、CM2f、CM3c、CM4c、

CP2、CP4の各型式を加えると、南東アラビア北西部ハジャル山脈の西側には9 種類もの独自の型式が分布し、地域色豊かな型式が認められる。特に、シマールやジャバル・アル＝ブハイスでは型式の多様性が顕著である。

またこの結果からは、多くの場合で系統レベルでは分布地は偏在しない点も指摘できる。ハジャル山脈の両側でCM2、CM3、CM4 系統の亜種がそれぞれ存在しており、いずれの系統が山脈の片側に集中する現象は、分布がほぼ西側に集中するCP 系統を除いて存在しない点から明らかである。したがって、型式レベルの分布が重要なことが読み取れる。

南東アラビア東部で確認できた集葬墓型式については、基本的に北西部で見られているものと同じ系統の範疇にあることも特徴である。ここから、集葬墓の構築に関して北西部と東部は共通性を持っている点も指摘できる。

一次葬墓型式の分布

一次葬墓についても、集葬墓と同様に分布が偏る型式と広範囲に存在する型式が確認できた。ただし、1 遺跡のみで確認できた型式は限定的、かつ同一遺跡内で他の型式と並存することが読み取れた。この局所的な型式には、IG4 およびIS1c がある。IG4 型はタヌーフ（Tanūf）WTN13 遺跡に、IS1c 型はアダム南（Ādam South）遺跡に分布し、両遺跡は南東アラビア東部に位置する（図4D、F）。

それ以外の型式は複数の遺跡で確認できたが、分布状況は数通りある。

南東アラビア東部にのみ存在する型式には、IG5、IS2c が挙げられる。IG5 型はユールが定義するグール型に相当し⁹⁾、現時点でワーディー・グール（Wādī Ghūl）遺跡およびコリン・アッ＝サッハイマ遺跡でのみ確認できた（Yule 2001: 40-41）。両遺跡は、直線距離で30 km 以下であり一定の地理的範囲に収まる（図4F）。IS2c 型については、確認できた遺跡の数は多くない。コリン・アッ＝サッハイマ、アル＝ハシュバ、およびタヌーフ WTN13 の各遺跡で確認できたが、タヌーフ WTN13 での発見例が現状のほぼ全てを占める（図4E）。またこれらの遺跡は、すべて南東アラビア東部のハジャル山脈を挟んで内陸側にある点も特徴であり、一定の地域性を看取できる。

南東アラビア東部を中心に分布する型式には、IG3、IS1b、IS2a、IR1 が該当する。IG3 型は、マシーラ型（Carter 1997: 44-45）に相当し、マシーラ島のサフラト・アル＝ハドリー（Sachrut al-Hadri）遺跡に集中して分布するほか、サマド・アッ＝シャーン（Samad ash-Shān）、アダム北（Ādam North）およびバート（Bāt）の各遺跡にも存在す

る。さらに、北西部のジャバル・ファーヤ遺跡でも発見例がある（図 4E）。IS1b 型は、アーシマ遺跡を除いて東部の 12 箇所遺跡に存在し（図 4D）、分布地に偏りは認められない。IS2a 型はアーシマ遺跡とジャバル・アル＝ブハイス遺跡を除いた、東部の 10 箇所遺跡に存在し、広範囲に亘る分布が確認できる（図 4E）。ハフィート期ケルン墓転用例の IR1 型は、北西部のカルン・ビント・サウードに加え、ジャバル・ハフィート（Jabal Hafit）、イズキ、シナーウ（Sināw）に分布する（図 4F）。現状では南東アラビア北西部の東側から東部に点在しており、広範囲で既存墓が流用されていた可能性を示唆する。ハフィート期ケルン墓は南東アラビア全土で 10 万基を超えるとされる（Cleuziou and Tosi 2007: 122）が、発掘された事例の数はこの推定に対してわずかであり、実際に存在する類例はさらに多い可能性がある。

上記以外の型式は南東アラビア全体に亘って分布を確認できた。もっとも普遍的な型式は IS1a 型で、確認できた遺跡の数は 20 に及ぶ。内訳は、北西部 5 箇所および東部 16 箇所であり、確認できた数も 136 基と最多を占める（図 4D）。次に、多いのは IS2b 型で、北西部 4 箇所と東部 5 箇所の計 9 箇所の遺跡で確認できた（図 4E）。本型式は、東部において分布がやや粗である点が特徴である。その他、確認できた遺跡が少ない IG1 型、IG2 型、IR2 型についても局所的な分布は見られず、各所に散発的に存在する（図 4F）。IG1 型は、アーシマ、ビディヤ、アードム北、パートの各遺跡において、IG2 型は、ガリーラ、シマール、マズィヤド（Mazyad）、サマド・アッ＝シャーン、サルート／ビシヤの各遺跡において発見されている。またウンム・アン＝ナール期円形墓の転用である IR2 型は、モワイハート（Mowaihat）、ヒーリー北、クメイラ／アル＝アイン（Qumayrah/Al-Ain）、パート、サルート／ビシヤで確認できた。

以上から一次葬墓は、局所的に分布する型式が少なく、東部を中心に広範囲に分布する型式が多い点を確認できた。なかでも、最も単純な構造を有する IS1a 型は最も多数かつ普遍的に分布する。南東アラビア全体で一次葬墓の型式は概ね共通しており、明確な地域性が見出し得ないことが多く、分布が局所的な IG4 型や IS1c 型や、東部の一定範囲に分布箇所が収まる IG5 型や IS2c 型は例外的であると言える。

したがって、各墓型式の分布から見たワーディー・スーク期墓の型式に関する地域性は、集葬墓と一次葬墓とでは異なる様相を呈する。この点は、単に東西の文化差を示すのではなく、別の要因を予期する。以上を踏まえ、墓型式の組み合わせ関係、各型式の立地環境、および前時期遺跡の有無の観点から墓制の地域性に関する背景の掘り下げを試みる。

(2) 墓型式の組み合わせ関係

前節で実施した各型式の分布を踏まえ、本節では同一遺跡における墓型式の組み合わせ関係を把握し、墓型式の選択に関する多様性を検討する。

集葬墓型式の組み合わせ関係

局所的な分布を示し、各遺跡に独自の CM2d、CM2e、CM2f、CM3c、CM4c、CM4e、CP2、CP4 の各型式は、常に別の型式と組み合わせることが読み取れた（表 1）。特にシマール遺跡では CM2d 型と CM3c 型が、ジャバル・アル＝ブハイス遺跡では CM4c 型と CP4 型が、一次葬墓型式を含むそれぞれ合計 9 および 8 型式の中の一部を構成しており、1 箇所の遺跡で確認された墓の型式数としては最多の部類に入る。なお 1 遺跡に計 5 種類以上の型式を有する事例は、この他にサルート／ビシヤ遺跡以外にない。また、ビトナ、ダーヤー、カルン・ビント・サウードの 3 遺跡では独自の型式が 2～4 種類の型式の中で共存する。以上を総合すると、ある遺跡で独自の集葬墓型式は多くの型式が確認された墓地で見られ、造墓に関わる多様かつ地域色豊かな様相を示していると指摘できる。

比較的近接するか一定の地理的な分布の範囲に収まる、CM2a、CM3a、CM4b の各型式の組み合わせ状況は多様である（表 1）。オマーン湾岸のみで見られる CM4b 型は 4 遺跡全てで単独で造営されて他型式とは組み合わせず、この地域に独自の排他的な様相を呈する。CM3a 型は、シマール遺跡では並存する多様な墓型式の一角を占める。またアル＝ハット遺跡においても詳細不明なワーディー・スーク期墓が報告されており（de Cardi et al. 1994: 47）、本型式も複数の他型式と組み合わせ可能性が高い。CM2a 型もシマール遺跡およびダーヤー遺跡において、4 種類以上の墓型式の一角を構成し、地域性と捉えられる。

比較的広範囲の分布を示す集葬墓型式の場合、組み合わせ関係の地域性を明瞭に観察できないが、南東アラビア一円に共通する 2 つの傾向が読み取れる。1 点目として、CM2g 型と CM4d 型は常に 8 種類以上の型式を有する墓地で造営される点があげられる（図 4A-B、表 1）。いずれの事例も該当する遺跡は地理的に離れているが、多様な型式組成の一角を構成する点で共通性を有する。2 点目として、CM2b、CM2c、CP1、の各型式は 4 種類以下の型式を擁する墓地に確認できる（図 4A-B、表 1）。この点は 1 点目とは逆に、比較的多様でない型式組成の中で造営されるという共通点を示している。その他の集葬墓型式は、遺跡によって組み合わせの状況は様々で、明確な地域的傾向を見出すことは難しい。

表3 墓型式ごとの地形別遺跡数（地形I：海岸部沖積地、II：内陸部沖積地、III：丘陵斜面、IV：峡谷内低位段丘、V：低丘頂部、VI：海岸段丘、VII：峡谷内高位段丘、VIII：丘陵頂部）

比高差	地形	CM1	CM2							CM3			CM4					CP				IS1			IS2					IG					IR		該当 遺跡数		
		a	a	b	c	d	e	f	g	その他	a	b	c	a	b	c	d	e	1	2	3	4	a	b	c	a	b	c	その他	1	2	3	4	5	1	2			
低	I	3	2	1	1	1	0	1	1	0	1	1	1	2	4	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	1	24
	II	2	0	2	1	0	1	0	2		2	1	2	0	2	0	1	1	0	1	0	3	1	12	11	1	0	8	8		2	4	2	4	0	2	0	5	81
中	III	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	1	0	0	2	1		0	0	0	0	0	0	0	0	8	
	IV	0	0	0	0	0	0	0	1		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	V	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	VI	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	1	0	0	0	0	1		
高	VII	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1		1	0	0	0	1	0	0	0	4		
	VIII	0	0	0	0	0	0	0	0		1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	2	1	0	1	2	0		0	0	1	0	0	4	0	16	

一次葬墓型式の組み合わせ関係

分布地がタヌーフ WTN13 遺跡とアードム南遺跡に限定される IG4 型および IS1c 型については、それぞれ 2 型式または 4 型式と組み合わせる（表 1）。

南東アラビア東部にのみ分布する IG5 型と IS2c 型については、どちらも 3 種類以下の型式との組み合わせ関係を読み取れる。IG5 型は、2 型式以下で組み合わせたり、本型式を擁するワーディー・グールおよびコリン・アッ＝サッハイマ両遺跡はハジャル山脈南側で地理的に比較的近接するため、この地域の独自な様相を示す可能性がある。IS2c 型も 2～3 種類の型式との組み合わせ関係にあり、同一墓地内の限られた型式群の一角を占める。

南東アラビア東部を中心に分布する IG3、IS1b、IS2a、IR1 の各型式については、多様な組み合わせ関係を呈する。まず IG3 型は、サフラト・アル＝ハドリー遺跡において唯一の型式であり、地域的な特色を示している。その一方で、他の遺跡では複数の型式の中の一つにすぎない。IS1b 型も多く遺跡で他型式と並存する一方で唯一の型式である場合もあり、東部における基本的な型式として位置付けられる。IS2a 型もまた IS1b 型と同様な傾向を示し、多様な組み合わせ関係を示す一方で、ある地域に特有な特徴は看取できない。IR1 型は、転用例という性質上、単独分布の場合もワーディー・スーク期の新規墓地に並存する場合のどちらもあるため、明瞭な地域的傾向は読み取り難い。

最後に、南東アラビア全体で見られる IG1、IG2、IR2、IS1a、および IS2b の各型式は、型式ごとに多様な組み合わせ関係を呈する。特に IS1a 型式は同一墓地内で唯一の型式となる事例もあるため、最も基本的かつ地域色の薄い一次葬墓型式として位置付けられる。

これらの結果からは、集葬墓・一次葬墓ともに型式による組み合わせ関係の様相の違いが読み取れた。すなわち、CM4b 型が排他的な造営がなされる一方で、シマール遺跡やジャバル・アル＝ブハイス遺跡の

ように多様かつ独自の型式や一次葬墓型式を含む事例も確認できた。また、一次葬墓の一部は広範囲で組み合わせ関係上の基本的な墓型式となっている点も読み取れた。特に集葬墓の多様性には、墓の形態の選択に関わる地域性が反映されている可能性が読み取れる。この点は一次葬墓の IG5 型や IS2c 型にも共通する。

(3) 各墓型式と立地地形の関係性

次に、立地と墓型式の関係性から地域性を把握するため、各墓型式が所在する地形を観察した。対象の立地箇所における比高差を低中高の三段階に便宜的に設定し¹⁰⁾、帰納的に分類した次の計 8 種類の地形と各墓型式の関係を検討した。低比高差の遺跡立地地形として海岸部沖積地および内陸部沖積地を、中比高差の事例として低丘頂部、丘陵斜面、海岸段丘および峡谷内低位段丘を、高比高差の事例として峡谷内高位段丘および丘陵頂部、を設定し、これらの地形に該当する遺跡の数を墓型式ごとに集計した上で合算した結果が表 3 である。第 4 章第 1 および 2 項で示した通り、複数の墓型式を含む遺跡があるため、この表の該当遺跡数は本稿で対象とする遺跡の数とは一致しない。表 3 からは、多様さとは裏腹に多くの型式が概ね低比高差で平坦な海岸部沖積地や内陸部沖積地にあることが読み取れる。一方で、高比高差の場所であっても丘陵頂部は造営された墓が多い点も読み取れる。特に、集葬墓型のうち CM1、CM2、CM3 系統は、ほぼ全て低比高差の開けた場所に造営されることがわかる。その一方で、分類不能な CM2 系統のうち、高比高差の地形に位置するワーディー・アル＝ザハイミ S66 遺跡では、開けた幅広い丘陵頂部に造営されている。また、CM4 系統や CP 系統の中には、中・高比高差の地形に造営される型式も確認できる。このうち、CP 系統の高比高差事例は全てカルン・ピント・サウード遺跡である。オマーン東部の集葬墓事例は、CM2 系統を含むイズキ遺跡やアル＝ハシュバ遺跡では低比高差の場所に所在するのに対し、CM4 系統が 2 型式あるサルート／ビシヤ遺跡では中または高比高差の場所に墓

表4 ワーディー・スーク期墓地におけるウンム・アン＝ナール期遺跡の種類

	墓地のみ		集落/活動痕跡のみ		墓地・集落/活動痕跡		なし		合計
	遺跡数	%	遺跡数	%	遺跡数	%	遺跡数	%	
北西部	5	17.9	1	3.6	7	25	15	53.6	28
東部	5	15.2	1	3	8	24.2	19	57.6	33
合計	10	16.4	2	3.3	15	24.6	34	55.7	61

が造営されている。以上から、集葬墓型式の造営地は、低比高差地へ集中する傾向にあるが、地形条件や一部の型式は中・高比高差地にも造営され得る。

一次葬墓型式は、比高差を問わず様々な地形に造営される事例が多い。IS1c 型を除き、IS1 系統や IS2 系統は場所を問わず造営される。その一方、構築に当たって天然の巨石を利用する必要上、IG4 型は峡谷内高位段丘に立地が限定される。また IR 系統は、再利用元の墓に依存し、IR1 型はハフィート期墓に一般的な丘陵頂部に (Deadman 2012a)、IR2 型はウンム・アン＝ナール期墓に一般的な沖積地に分布する (Deadman 2012b)。

立地地形の検討からは、集葬墓型式の造営には低比高差の土地が概ね好まれ、一次葬墓型式については強い規制がなく造営された可能性を指摘できる。ただし、一部の型式には構造上の制約により造墓可能な立地上の条件が限られる事例や、恐らく地形と関連した型式選択が示唆できる事例があるなど、墓型式の選択には複数の要因が介在する可能性が読み取れた。注目すべきは、これらの傾向は南東アラビアの全域で概ね適用可能な点で、墓型式の選択にあたって地形的な要因に根ざした地域性は認めることが難しい。したがって、ワーディー・スーク期の墓制の東西差について、別の要因を考慮する必要がある。

(4) 前時期の遺跡所在地との共通性

最後に、近年明らかになった南東アラビア東部における集葬墓が造営された要因を、遺跡利用の継続性の観点から探るため、紀元前3千年紀ウンム・アン＝ナール期遺跡の所在地との関連を検討した。そのため、本稿の対象遺跡におけるウンム・アン＝ナール期遺跡の有無を、墓地のみ、集落/活動痕跡のみ、墓地および集落/活動痕跡双方、なし、の4つに区分し、各区分に該当する数を集計した (表4)。その結果、ワーディー・スーク期墓地の半数以上は、ウンム・アン＝ナール期遺跡の存在しない場所にあることが読み取れた。この傾向は南東アラビア全体で共通する。一方で、ウンム・アン＝ナール期の何らかの遺跡がある場所に、ワーディー・スーク期墓地が存在する事例も確認でき、南東アラビア北西部と東部でその割合が概ね類似する点も読み取れた。最も多いのは、ウンム・アン＝ナール期の墓地と集落/活動痕跡双方が存在す

表5 ウンム・アン＝ナール期墓地・集落所在地にワーディー・スーク期墓地を含む東部の遺跡における基壇数。X は集葬墓の存在を示す。

遺跡	基壇数	集葬墓	引用文献
パート	10	-	Thornton and Cable 2016; Döpper 2021b
サルート/ビシヤ	8	X	Orchard and Stanger 1999; Cable and Thornton 2012; Degli Esposti 2019
アル＝ハシュバ	3	X	Kluge 2021
タヌーフ	2	-	de Cardi et al. 1976
サマド・アッ＝シャーン	1	-	Weisgerber 1981
イズキ	1	X	Schreiber 2007
ダフワ	0	-	Al-Jahwari et al. 2018
クメイラ/アル＝アイン	3	-	Cable and Thornton 2012

る場所にワーディー・スーク期の墓地が築かれる事例で、本稿で対象とした遺跡のおよそ 1/4 を占める。この事例のうち、アラビア半島北西部ではモワイハート遺跡以外のシマール、アル＝ハット、アーシマ、カルバー、ヒーリー、ワーディー・アル＝ザハイミ S66 の各遺跡で集葬墓型式が存在する。また東部では、集葬墓を含む3箇所の遺跡全てがこの事例に該当する。周辺でウンム・アン＝ナール期の円形石造基壇¹¹⁾のみが現在確認できているタヌーフ遺跡を除くと (de Cardi et al. 1976: 160-161; Kuronuma, Miki et al. 2022a: 3, 2022b: 74)、このカテゴリーに属するほぼ全ての東部のワーディー・スーク期墓地が、ウンム・アン＝ナール期のオアシス定住集落や基壇および付随墓地が存在する場所に築かれたことを確認できた。

ウンム・アン＝ナール期の集落規模を判断する上で一つの基準 (cf. Kluge 2021) となっている基壇数に着目して南東アラビア東部における状況をさらに掘り下げると、ワーディー・スーク期の集葬墓を含む遺跡は基壇数の多寡とあまり関連しないことが読み取れた (表5)。例えば、サルート/ビシヤには8基の基壇が存在するが (Orchard and Stanger 1999: Figure 2; Cable and Thornton 2012: 387-388; Degli Esposti 2019)、イズキでは1基に留まる (Schreiber 2007: 129)。その一方で、10基ものウンム・アン＝ナール期の基壇が存在するパート遺跡群では (Thornton and Cable 2016: 6)、集葬墓は確認されておらず、全て一次葬墓である (Williams and Gregoricka 2016;

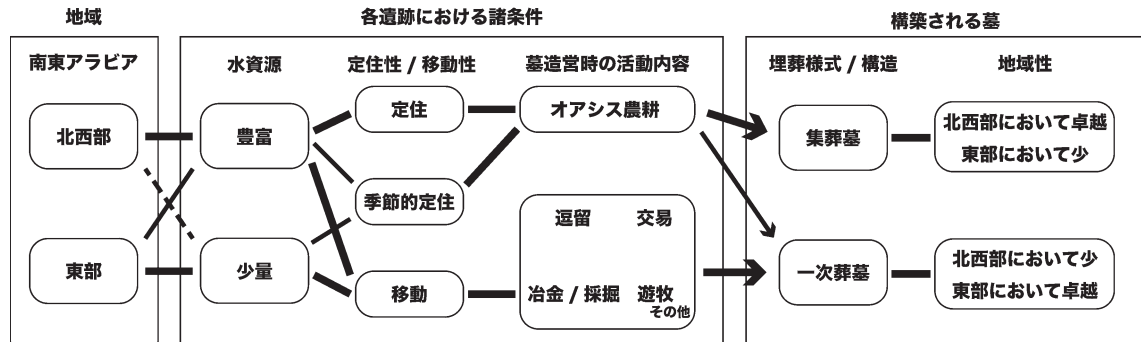


図5 ワーディー・スーク期墓制の地域性に関する模式図。線の太さは項目間の連関の強さを示す。太線は強、細線は中程度、破線は弱い連関を指す。

Swerida and Thornton 2019: Figure 18; Schmidt 2020: 190; Döpper 2021a: Table 1, 2021b: 79)。ここから、東部のワーディー・スーク期の集葬墓は、ウンム・アン＝ナール期にある程度の規模を有したオアシス定住集落と同一の遺跡に造営される点を確認でき、その立地条件は北西部と類似した特徴を有する。ただし、バート遺跡のように、前時期のオアシス集落が大規模であってもワーディー・スーク期の集葬墓が必ずしも造営されない点も東部の特徴である。つまり東部では、当該遺跡における水資源の豊富さは集葬墓が構築されうる条件に止まることが読み取れる。この点は同様の条件下で再利用例を除いて例外なく集葬墓が築かれた北西部とは異なる。

5. 考察—ワーディー・スーク期墓制の地域性の背景

上記の結果からは、ワーディー・スーク期の墓制には、南東アラビア全体で共通する側面と狭い地理的範囲に特有の側面の両方が存在しており、単純に墓制の差異を東西に二分できないことが読み取れた。この共通点・差異点を踏まえると、ワーディー・スーク期墓制の地域性の背景は、図5のように模式化できる。

集葬と一次葬は、ともにワーディー・スーク期における南東アラビア共通の墓制であり、墓制の基盤となっている。この点で墓制に東西の文化的地域差は存在しない。その一方で、埋葬様式や墓の形態に関する見かけの東西差の発現には、当該遺跡における地形や移動経路・定住可能性などの立地や活動内容に関する要因が、埋葬様式の選択に大きく関連する条件となる。東部で一次葬墓が大勢であること理由は、通年で定住可能なオアシスの数が北西部よりも豊富ではなく、一時的な移動経路上に位置すると考えられる事例が多い点にあると考えて良い。逆に北西部においては定住可能な場所が多いが、非定住的な様相を呈する場所では一次葬墓のみが発見された事例も存在する。例えば、銅製鍔に当たるワーディー・アル＝ヒルウ

(Wādī al-Hilū) 遺跡ではIS1a型の一次葬墓が発見されている(Uerpman et al. 2018: Figure 3)。つまり、北西部・東部ともに、定住的であれば集葬墓が造営されることがあり、逆に非定住的であれば一次葬墓が設けられ得る。当該遺跡における集葬または一次葬の存在は、葬送理念上の基盤を共有しながらもその地に特有な立地条件に規定されて発現の様相が異なっていたと見られる。

一方でこの墓制における特徴は、紀元前3千年紀末に始まった乾燥化への適応の結果形成されたものであり、ウンム・アン＝ナール期のものから最適なたたひに変容させた、ワーディー・スーク期の新たな特色である。特に集葬については、建築構造的に過渡期～初期の墓として位置付けられるCP1型に代表されるように、ウンム・アン＝ナール期から断絶なく継続していたと見られる。南東アラビア北西部の諸遺跡では後期青銅器時代から前期鉄器時代(紀元前1300～300年)の使用が確認されたCM2系統墓があり(Genchi et al. 2018: Figure 1; Frenez et al. 2020: Figure 2)、集葬の習慣はワーディー・スーク期を通じて継続した基本的な墓制であると見て良い。その一方で、一次葬は移動性の高まりと関連するワーディー・スーク期に新規の要素であり、季節的な滞在中や移動途中で発生した死者の埋葬に当たって造墓に関わる手間を抑えるために開始されたとも解釈できる。簡素な構造のIS1系統やIS2系統などや、古代の交通路と見られるタヌーフ峡谷(Miki et al. 2022: 103)で発見されたIG4型は、この好例にあたると言える(cf. Kurohuma et al. 2021: 106)。本稿で対象としたワーディー・スーク期墓地の半数以上はウンム・アン＝ナール期の遺跡が存在しない場所にあり、人類活動の変化に伴う墓地造営に関わる傾向の変容や、特に峡谷や小規模逗留地周辺を移動途中の埋葬地として利用し始めた傍証と考えて良い。

墓地や集落または定住や移動との関係について、墓制の東西差に疑義を唱えたりゲティは、南東アラビア

北西部の集葬墓を伴う遺跡群を定住的な本拠地とし、東部における一次葬墓の卓越を北西部から人々が資源採取や交易などの移動に伴って一時的に各所に墓地が形成された結果と解釈した (Righetti 2015: Vol. I, 211-212)。しかし、本稿での分析からは、ワーディー・スーク期の墓制を巡る状況はより複雑であると考えられる。すなわち、北西部・東部の両方で定住集落が中核となり、それらが高頻度化した移動によって接続されており、一次葬墓は移動・逗留・長期滞在の結果として各所に遺されたと解釈したい。東部におけるワーディー・スーク期定住集落の件数や密度は北西部よりも低い、基本的な集落・墓地分布パターンは共通していたと考えられる。東部における集葬墓の少なさは、南東アラビアの東西における定住可能な土地の多寡に関する濃淡を示していると解釈できる。北西部・東部を問わず、当時の墓地造営は、条件・活動内容によって適宜選択されていたのであり、ワーディー・スーク期の埋葬様式とそれに付随する墓形態の背景には地域差というよりは、墓制の二重性があったと言えるだろう。

最後に、ワーディー・スーク期墓の形態的な多様性について考える。当該墓形態の選択性には、墓地を造営する集団に起因する側面が大きいと考えられる。この点は特に集葬墓に当てはまり、系統単位では墓の構造・形態に関する原理が概ね各遺跡に通底するものの、型式単位では各地に独自例が現れたと考えられる。その発現の仕方は地域によって異なり、特に南東アラビア北西部のハジャール山脈東側では、CM4b型のみを排他的に造営する共通の集団がある程度の地理的範囲に存在した可能性が示唆される。その一方で、北西部のハジャール山脈西側では、そうした強い結びつきは希薄で、近接する遺跡で類似した形態の墓を有する一定程度の地理的範囲が重なり合っており、集団間の移動や交流が活発だった可能性を示唆する。この点は、フォークトの述べる移動経路上の墓地立地との関連性と合致する (Vogt 1998: 275; cf. Gregoricka 2011: 336)。これに加え、シマールのように、墓の形態に緩やかな共通性を有しつつ多様または独自な事例からなる墓群を有する遺跡を含むことが北西部ハジャール山脈西側の諸遺跡を遺した集団の特色と捉えられる。ただ、こうした集団差の可能性とは無関係に、広範囲で各所に分布が確認できる型式もあるため、墓形態の選択には、一定程度の造墓上の理念的基盤を踏まえつつ、各地に独自な様相が反映された可能性が高い。なお、多数の集葬墓を擁する遺跡については、各墓の使用時期が重複していない可能性も考えられ、形態の多様さは建築時期の時間差を反映している可能性も排除できない (cf. Vogt 1998)。しかし、各墓の使用期間の推測は概して困難で、型式上の先後関係が、

使用時期と同期するとは限らない点は注意を要する。いずれにせよ、比較的近隣の遺跡と形態を共有する点は、情報の共有・伝達を示唆し、南東アラビア全体で移動性が増したワーディー・スーク期の状況を反映していると考えられる。

一方で、一次葬墓形態の多様性については、集団差以外にも造墓にかかる手間などを背景と考える必要がある。一次葬墓は広範囲で共有される IS1 系統や IS2 系統が大多数を占め、造墓に関する共有情報に基づいて各所に定型的な墓が造営されていた可能性が高い。単葬が主体であることを考えると、細かい構造上の違いは、被葬者の性差や地位、造営集団の違いを示している可能性が考えられる。ただし現状では、発掘された墓の中に遺体や副葬品が残っている事例が少なく、定量的に差異を可視化することが難しい。また、既存墓の転用など造墓時のコストを低減させて造営された一次葬墓事例については、定型的な墓の造営を基本としつつも、構造を適宜変更しながら、移動の過程で造墓と埋葬を実施していた可能性がある。リゲティは、一次葬墓から遺体や副葬品が発見される事例が少ない点に着目し、移動路上の一次的な遺体の安置施設としての機能を提起しているが (Righetti 2015: Vol. I, 211-212)、現状では事例が乏しく、一次葬墓には定住的な集落で発見されている事例もあり、移動と造墓が連関しない場合も想定できるため、妥当性を判断できない。

以上から、ワーディー・スーク期墓の形態的な多様性は、集葬墓については集団差を示している可能性があるが、一次葬墓の場合はそれに加えて造墓時の状況により基本となる墓の形態から適宜変更を加えていた可能性が考えられる。いずれの事例でも移動に伴う墓形態に関する情報の伝達・共有が重要な役割を果たしており、各所に独自の様相は共通の基盤の上に様々な要因が付加された結果として捉えられるだろう。

6. 終わりに

本稿では、ワーディー・スーク期の墓制に関する地域性を、墓の型式や分布、立地条件を起点に検討した。その結果、立地的側面や活動内容の違いがワーディー・スーク期墓制の地域的な特徴と関わる可能性を提示した。

集成を踏まえた検討により、一次葬墓については、一部を除き南東アラビア一円で概ね共通する様相を見せることを確認した。この点は、一次葬に関わる一定の文化的共通基盤が存在することを示唆し、従来考えられていた遊動などの生業のみが一次葬墓を造営する成因となるとは必ずしも捉えることができない。集葬墓については、従来の言説で東西差を示す明確な基準

として取り扱われ、北西部における高い定住性の反映と唱えられてきた。しかし、近年の発見事例を踏まえると、東部においても水資源の利用可能性に恵まれ、かつ交通上の要衝に当たる場所においては定住的な生活が引き続き可能であり、北西部の場合と同様に、そうしたオアシス集落の一部には集葬墓を設けて死者の埋葬が行われていたと考えられる。つまり、従来考えられていたワーディー・スーク期墓の地域性は文化的な東西差ではなく、各地のローカルな環境・立地が反映された結果であり、東西に二分可能なものではない。東部と比べ、北西部ではより環境に恵まれた場所が多くあり、集葬墓の造営と継続的な運用が可能な定住集落がより多く存在したことはこれまでの遺跡集成結果からも示唆される (Velde 2009: 74; Righetti 2015: Vol. II, 17; cf. 黒沼ほか 2021: 表 1)。しかし東部でも同様の好条件が揃えば、北西部と同質の生業・墓制を有していた可能性を提起でき、埋葬様式の選択に当たって南東アラビア共有の基盤的な葬送観念が存在したと考えられる。ただし、パート遺跡やサマド・アッ＝シャーン遺跡のようにワーディー・スーク期における一定の水資源の可能性や集落址の存在が明らかとなっても、東部における立地上の好条件は必ずしも全て集葬墓の造営に繋がるとは限らない場合がある。この点は、当該遺跡の局所的な状況や、集団規模などに関わると考えられ、東部特有の地域性を示していると言える。一方、東部における一次葬墓の卓越は本稿での検討からも明らかであり、例えば峡谷内に存在するタヌーフ WTN13 遺跡やザンマ遺跡のように、移動途上での死者の埋葬の痕跡として判断可能な墓地事例が多いことも事実である。この点も墓地所在地の立地やそこでの活動内容が密接に関わっていると考えられる。以上から、多様な地形が存在し、定住集落を基幹に移動が盛んであったことが示唆される当時の南東アラビアでは、墓制ならびに葬送観念上の基盤は北西部・東部両方で共通しており、当該墓地における立地や活動内容が墓制を規定し、物質文化上の東西差として表出していると捉えられる。

ワーディー・スーク期の墓地遺跡は現在でも発見・調査が継続している。本稿で用いた改訂版の型式分類は現時点での参照可能な既知の事例を包括しており、今後の調査の進展次第では新たな型式が見つかる可能性がある。未発見の事例に加えて、現段階で未出版の事例もあるため、本稿で示した分析結果のうち、特に型式単位で見た場合の分布状況が今後変わり得る点は留意する必要がある。ドゥパーによって提起されている通り (Döpper 2021a: 324)、南東アラビア東部では今後未踏査区域の調査が進展することで、新たな発見例が増加することが期待できる。そのため、今後も逐次事例を蓄積し、ワーディー・スーク期墓制の地域

性に関する見解を、改訂していく必要がある¹²⁾。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20J01674 の助成を受けたものである。本稿を草するにあたり、総合地球環境学研究所の近藤康久准教授からは、タヌーフにおけるワーディー・スーク期墓図版データの使用をご許可いただいた。また P. A. ユール教授 (Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg) からワーディー・グール、コリン・アッ＝サッハイマおよびイティエにおける事例をご教示いただいた。記して御礼を申し上げます。

註

- 1) 南東アラビアは今日のアラブ首長国連邦 (UAE) およびオマーン国北部に相当する。
- 2) 本稿では墓制に関する用語を下記の通り定義する。改葬とは、一度埋葬した遺体を別の場所に移して再度埋葬することを指し、遺体の埋葬は一回では完結せず複数の墓に関連する。一次葬とは、死亡後に一回で遺体の埋葬が完結する事例であり、発見される遺体は当初から移動していない。通常、遺体は一体のみの単葬だが、同時に複数の遺体を埋葬する複葬も存在する。集葬は、一つの墓に複数の遺体がある埋葬である、逐次追加された一次葬からなるが、追加の埋葬時に既存の遺体が墓内で移動され原位置から動く事例も含む。本稿では特に長期間に亘って逐次遺体を収容することを前提とした構造の墓を示す。既存墓再利用埋葬は、一次葬だが既存の墓を再利用した埋葬で、新たな墓の構築はない。
- 3) 南東アラビア北西部は UAE とオマーンのムサンダム (Musandam) 特別行政区全域、ワーディー・ジジ (Wādi Jizzi) 以北の北バーティナ (North Batinah) 行政区およびブライミー (Buraimi) 特別行政区を含む。同東部はそれよりも東の地域を包括し、マシーラ (Maşīrah) 島を南限とするオマーン北部を指す。
- 4) 細かな定義の違いはあるものの、この埋葬様式に基づいた墓の分類は、今日新たに分類する場合も最初の基準として用いられている (Righetti 2015: Vol. I, 126-127)。
- 5) 本邦においても、シマール型やガリーラ型は、ワーディー・スーク期の代表的な墓の型式として後藤健により言及されている (後藤 2014: 173-174)。
- 6) ただしフォクトが言及した事例は、かつて後期ワーディー・スーク期と呼ばれ現在は後期青銅器時代 (紀元前 1600-1300 年) (Velde 2003: 102) と呼称される時期の墓を含んでいる。カーター以後の分類案では、後期青銅器時代が分別されるようになったが、紀元前 2 千年紀における型式の系統的な繋がりを重視した分類の考え方により、前期鉄器時代 (紀元前 1300-300 年) まで含めて一体的に分類されることが多い。
- 7) リゲティの個人葬には、単葬に加え合葬も含まれ、一回で終了する埋葬を意味すると見られるため、表現として不十分である。そのため本稿では一次葬と読み換える。
- 8) CM4e、IG4、IG5、IR1、IR2、IS2c が新規に追加した型式である (表 2)。その一方でリゲティ分類にある CM3d 型は後期青銅器時代の型式であるため除外した。
- 9) なお本型式は類例に乏しく、ユールが主張する時期についても (Yule 2001: 45; ユール氏私信 2020 年 12 月)、踏査のみのため不確実である。
- 10) 比高差は近接する涸れ川を基準に、低: 1-3 m 未満、中: 3-10 m、高: 11 m 以上とした。
- 11) 基壇とは、別名タワーと呼称される、ハフィート期からウンム・アン＝ナール期の南東アラビア各地で建造された石

像建築物である。外形は直径 20 m 前後の円形を呈すが、矩形などの事例もある。その用途は不明瞭だが、水利施設としての機能が一説に考えられている (cf. Cable and Thornton 2012: 384)。以下、基壇と呼称する。

- 12) 本稿提出後に、キドファア遺跡の詳細な報告書が刊行された (Al-Tikriti 2022)。報告書には詳細な図版が掲載され、当該遺跡の墓型式は CM4b 型よりも CM4d 型に近く、同型の墓がもう 1 基あることが判明した。これにより CM4b 型の地域性は本稿で示した様相から若干異なることとなった。今後、新規事例が蓄積し次第、稿を改めて再検討したい。

参考文献

- Benoist, A. and S. A. Hassan 2010 An Inventory of the Objects in a Collective Burial at Dadna (Emirates of Fujairah). In L. Weeks (ed.), *Death and Burial in Arabia and Beyond. Multidisciplinary Perspectives*, 85-99. Oxford, Archaeopress.
- Böhme M. 2012 The Restoration of Tomb 154 in Bat. In D. T. Potts and P. Hellyer (eds.), *Fifty Years of Emirates Archaeology. Proceedings of the Second International Conference on the Archaeology of the United Arab Emirates*, 112-119. Abu Dhabi, Ministry of Culture, Youth and Community Development.
- Bortolini, E. and O. Munoz 2015 Life and Death in Prehistoric Oman: Insights from Late Neolithic and Early Bronze Age Funerary Practices (4th - 3rd Mill. BC). In Ministry of Heritage and Culture (ed.), *Proceedings of the Symposium. The Archaeological Heritage of Oman: September 7th 2012, UNESCO Headquarter, 125, Avenue de Suffren 75007 Paris*, 61-80. Muscat, Ministry of Heritage and Culture.
- Brass, L. and G. Britton 2004 An Archaeological Survey of Northern Fujairah, United Arab Emirates. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 15: 149-196.
- Cable, C. M. and C. P. Thornton 2012 Monumentality and the Third-millennium "Towers" of the Oman Peninsula. In S. Abraham, P. Gullapalli, T. P. Raczek and U. Z. Rizvi (eds.), *Connections and Complexity. New Approaches to the Archaeology of South Asia*, 375-399. Walnut Creek [CA], Left Coast Press.
- Carter, R. 1997 *Defining the Late Bronze Age in Southeast Arabia: Ceramic Evolution and Settlement during the Second Millennium BC*. Ph.D. dissertation. London, University College London.
- Cleuziou, S. and M. Tosi 2007 *In the Shadow of the Ancestors. The Prehistoric Foundations of the Early Arabian Civilization in Oman*. Muscat, Ministry of Heritage and Culture.
- Condoluci, C. and M. Degli Esposti 2015 *High Places in Oman. The IMTO Excavations of Bronze and Iron Age Remains on Jabal Salut*. Roma, «L'Erma» di Bretschneider.
- Corboud, P., A.-C. Castella, R. Hapka and P. Im-Obersteg 1996 *Les tombes protohistoriques de Bithnah (Fujairah, Emirats Arabes Unis)*. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Costa, P. M., G. G. Costa, P. Yule, G. Weisgerber, M. Kunter, C. Phillips and A. B. A. b. B. Al Shanfari 1999 Archaeological Research in the Area of Muscat. In P. Yule (ed.), *Studies in the Archaeology of the Sultanate of Oman*, 1-90. Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
- de Cardi, B., S. Collier, and D. B. Doe 1976 Excavations and Survey in Oman. *The Journal of Oman Studies* 2: 101-187.
- de Cardi, B., D. Kennet and R. L. Stocks 1994 Five Thousand Years of Settlement at Khatt, UAE. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 24: 35-95.
- Deadman, W. M. 2012a Defining the Early Bronze Age Landscape: A Remote Sensing-Based Analysis of Hafit Tomb Distribution in Wadi Andam, Sultanate of Oman. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 23: 26-34.
- Deadman, W. M. 2012b Unlocking the Early Bronze Age: Attempting to Extract Umm an-Nar Tombs from a Remotely Sensed Hafit Dataset (Poster). *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 42: 79-85.
- Degli Esposti, M. 2019 Excavations at the Early Bronze Age Site "ST1" near Bisayah (Sultanate of Oman): Notes on the Architecture and Material Culture. In R. A. Stucky, O. Kaelin and H.-P. Mathys (eds.), *Proceedings of the 9th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East June 9-13, 2014, University of Basel. Volume 3: Reports*, 665-678. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Degli Esposti M., F. Brandolini and A. Zerboni 2021 3D Digital Documentation of Archaeological Features, a Powerful Tool for Research and Dissemination. Case Studies from the Oasis of Salut (Sultanate of Oman). *The Journal of Oman Studies* 22: 214-227.
- Degli Esposti M., P. Ramorino, S. Spano and E. Tagliamonte 2018 Funerary Archaeology at Salut (Oman) 2017-2018: Insights on Middle Bronze Age Grave's Architecture and a Possible New Type of Third Millennium Grave. *Egitto e Vicino Oriente* 41: 193-210.
- Degli Esposti M., S. Spano, E. Tagliamonte, P. Ramorino, M. Sasso and W. S. M. Al Muzaini 2021 Funerary Architecture in the Wadi Suq Period and an Unusual Type of Third/Second- Millennium Grave: Initial Results from the Excavation of Prehistoric Burials in the Salut Archaeological Park, Central Oman. *The Journal of Oman Studies* 22: 73-98.
- Donaldson, P. 1984 Prehistoric Tombs of Ras al-Khaimah. *Oriens Antiquus* 23: 191-312.
- Donaldson, P. 1985 Prehistoric Tombs of Ras al-Khaimah. *Oriens Antiquus* 24: 85-142.
- Döpfer, S. 2021a The Middle and Late Bronze Age in Central Oman: New Insights from Tawi Said, Al-Mudhairib and the Wilayat al-Mudhaybi. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 32 (S1): 313-327.
- Döpfer, S. 2021b *Die Gräber von Bat und Al-Ayn und das Gebäude II in Bat*. Oxford, Archaeopress.
- Düring B. S., S. A. Botan, E. Olijdam and J. H. J. M. Aal 2019 The Bronze Age Cultural Landscape of Wādī al-Zahaimi. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 49: 115-127.
- Frenez, D., F. Genchi, H. David-Cuny and S. Al-Bakri 2020 The Early Iron Age Collective Tomb LCG-1 at Dibbā

- al-Bayah, Oman: Long-Distance Exchange and Cross-Cultural Interaction. *Antiquity* 95 (379): 104-124.
- Frifelt, K. 1975 On Prehistoric Settlement and Chronology of the Oman Peninsula. *East and West* 25: 10-86.
- Genchi, F., L. Fattore, L. Nava and E. Maini 2018 The LCG2 Complex at Dibbā (Musandam, Oman, II-I Millennium BC): Structural, Material, and Osteological Elements. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 48: 99-117.
- Genchi, F. and N. Larosa 2021 Funerary Evidence and Reuse Practices: The Cairn Burials at Al-Jamma in the South Batinah Foothills (Sultanate of Oman). *The Journal of Oman Studies* 22: 22-40.
- Gernez, G. 2016 La nécropole d'Adam Sud: Rapport préliminaire. *Revue d'archéologie de l'Orient ancien. Hors-Série* 2: 53-72.
- Gernez, G. and J. Giraud 2017 A Tale of Two Graveyards. The Excavations of Protohistoric Funerary Sites in Adam. In G. Gernez and J. Giraud (eds.), *Taming the Great Desert. Adam in Prehistory of Oman*, 49-80. Muscat, Ministry of Heritage and Culture.
- Gernez, G. and J. Giraud 2019 Exploring Continuity and Discontinuity from the Early to the Middle Bronze Age in Central Oman. In K. D. Williams and L. D. Gregoricka (eds.), *Mortuary and Bioarchaeological Perspectives on Bronze Age Arabia*, 121-140. Gainesville [FL], University of Florida Press.
- Gregoricka, L. A. 2011 *Mobility, Exchange, and Tomb Membership in Bronze Age Arabia: A Biogeochemical Investigation*. Ph.D. dissertation. Columbus [OH], The Ohio State University.
- Häser, J. 2003 Archaeological Results of the 1999 and 2000 Survey Campaigns in Wādī Banī 'Awf and the Region of al-Hamrā' (Central Oman). *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 33: 21-30.
- Hilal, A. 2005 Excavations at Qarn al-Harf 67, Ras al-Khaimah, 2001. In P. Hellyer and M. Ziolkowski (eds.), *Emirates Heritage Volume One. Proceedings of the 1st Annual Symposium on Recent Palaeontological and Archaeological Discoveries in the Emirates Al Ain, 2003*, 37-47. Al Ain, Zayed Center for Heritage and History.
- Al-Jahwari, N. S., K. Douglas, M. Al-Belushi and K. Williams 2018 Umm an-Nar Settlement at Dahwa (DH1), Oman: Preliminary Results of the Archaeological Investigations, 2014-2016. In S. Döpper (ed.), *Beyond the Tombs and Towers. Domestic Architecture of the Umm an-Nar Period in Eastern Arabia*, 29-49. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Al-Jahwari, N. S. and A. T. ElMahi 2007 The Geography of Location and Topos-Culture. Results of Excavations at Bausher Site, Sultanate of Oman. *Adumatu* 15: 7-34 (Arabic paper with English summary).
- Jasim, S. A. 2012 *The Necropolis of Jebel al-Buhais: Prehistoric Discoveries in the Emirate of Sharjah, United Arab Emirates*. Sharjah, The Department of Culture & Information, Government of Sharjah.
- Jasim, S. A. and E. Yusif 2018 Bronze Age Tombs from Jebel Faya. Emirate of Sharjah. *Annual Sharjah Archaeology* 15: 10-20.
- Kästner, J.-M. 1990 Vorbericht über zwei untersucht Kollektivgräber in Dhayah (Ras al-Khaimah, U.A.E.). In F. M. Andraschko and W.-R. Teegen (eds.), *Gedenkschrift für Jürgen Driehaus*, 339-346. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- Kästner, J.-M., N. Sahm and C. Velde 1989 *Excavations of the German Archaeological Mission to Ras al-Khaimah, Report of the 4th Season*. (Unpublished report). Göttingen, Seminar für Vorderasiatische Archäologie.
- Kluge, J. 2021 Die Türme. In C. Schmidt, S. Döpper, J. Kluge, S. Petrella, U. Ochs, N. Kirchhoff, S. Maier and M. Walter (eds.), *Die Entstehung komplexer Siedlungen im Zentraloman. Archäologische Untersuchungen zur Siedlungsgeschichte von Al-Khashbah*, 36-92. Oxford, Archaeopress.
- Kuronuma, T., T. Miki and Y. Kondo 2021 A Bronze- and Iron Age Cemetery at Wādī Tanūf, Ad-Dākhiliyah: A Preliminary Report of Years 2019-2020 Survey. *The Journal of Oman Studies* 22: 99-125.
- Kuronuma, T., T. Miki and Y. Kondo 2022a Archaeological Surveys of a Canyon and Floodplain in the Tanūf District, North-Central Oman: Optimised Methodology and Applications. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 2022: 1-21. doi: 10.1111/aae.12220.
- Kuronuma, T., T. Miki and Y. Kondo 2022b Early Bronze Age Cemeteries in the Tanūf District, Ad-Dākhiliyah Governorate. A Preliminary Report of Years 2017-2020 Surveys. *The Journal of Oman Studies* 23: 70-100.
- Madsen, B. 2017 *The Early Bronze Age Tombs of Jebel Hafit*. Aarhus, Jutland Archaeological Society, Moesgaard Museum and Abu Dhabi Tourism & Culture Authority.
- Miki, T., T. Kuronuma, H. Kitagawa and Y. Kondo 2022 Cave Occupations in Southeastern Arabia in the Second Millennium BCE: Excavation at Mugharat al-Kahf, North-Central Oman. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 33(1): 85-107. doi: 10.1111/aae.12210.
- Munoz, O. 2019 Promoting Group Identity and Equality by Merging the Dead. Increasing Complexity in Mortuary Practices from the Late Neolithic to the Early Bronze Age in the Oman Peninsula and their Social Implications. In K. D. Williams and L. A. Gregoricka (eds.), *Mortuary and Bioarchaeological Perspectives on Bronze Age Arabia*, 21-40. Gainesville [FL], University of Florida Press.
- Orchard, J. and G. Stanger 1999 Al-Hajar Oasis Town Again! *Iraq* 61: 89-119.
- Parker, A. G., A. S. Goudie, S. Stokes, K. White, M. J. Hodson, M. Manning and D. Kennet 2006 A Record of Holocene Climate Change from Lake Geochemical Analyses in Southeastern Arabia. *Quaternary Research* 66: 476-485.
- Pellegrino M. P., M. Degli Esposti, M. Buta, E. Tagliamonte and S. A. Hassan 2019 Grave-Goods from the Long Chamber Tomb "Dibba 76/1" (Fujairah, UAE): A First Inventory. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 30: 32-74.
- Pfeiffer K., J. Schönicke, I. Ruben, S. Reichmuth, C. Foster, L. Klisch and E. Petiti 2017 Archaeological Research in Fujairah: Qidfa Reconsidered. *Zeitschrift für Orient-*

- Archäologie* 10: 312-355.
- Phillips, C. S. 1987 *Wadi al Qawr, Fashgha 1, The Excavation of a Prehistoric Burial Structure in Ras al Khaimah, U.A.E., 1986*. Edinburgh, Department of Archaeology, University of Edinburgh.
- Phillips, C. S. 1996 Excavations at Kalba 1993-95. *Annual Sharjah Archaeology* 13: 13-31.
- Phillips, C. S. 1997 The Pattern of Settlement in the Wadi al-Qawr. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 27: 205-218.
- Righetti S. 2015 *Les cultures du Wadi Suq et de Shimal dans la péninsule omanaise au deuxième millénaire avant notre ère. Évolution des sociétés du Bronze moyen et du Bronze récent*, 3 Volumes. Ph.D. dissertation. Paris, Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne.
- Riley, M. and C. A. Petrie 1999 An Analysis of the Architecture of the Tomb at Sharm, Fujairah, U.A.E. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 10: 180-189.
- Rutkowski, L. 2020 Some Thoughts on the Burial Space inside QA 1-1, an Umm an-Nar Tomb in Wādi al-Fajj (Oman): A Case of Incomplete Paving of the Tomb's Floor. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 50: 307-320.
- Rutkowski, L. 2021 Umm an-Nar Soft-Stone Vessel Assemblage from Tomb QA 1-1 (Oman) Based on Finds Recovered from Half the Tomb. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 32 (SI): 213-242.
- Saunders, B., A. Caine and W. Deadman 2016 *Archaeological Rescue Excavations on Package 3 and 4 of the Batinah Expressway, Sultanate of Oman*. Oxford, Archaeopress.
- Schmidt, C. 2020 *Die Bestattungsgruben in Bat*. Oxford, Archaeopress.
- Schmidt C. and M. Walter 2021 Die Gräber. In C. Schmidt, S. Döpper, J. Kluge, S. Petrella, U. Ochs, N. Kirchhoff, S. Maier and M. Walter (eds.), *Die Entstehung komplexer Siedlungen im Zentraloman. Archäologische Untersuchungen zur Siedlungsgeschichte von Al-Khashbah*, 99-232. Oxford, Archaeopress.
- Schreiber, J. 2007 *Transformationsprozesse in Oasensiedlungen Omans. Die vorislamische Zeit am Beispiel von Izki, Nizwa und dem Jebel Akhdar*. Ph.D. dissertation. München, Ludwig-Maximilians-Universität.
- Swerida J. and C. Thornton 2019 Um An Nar Architecture & Society at the Bat Settlement Slope, Sultanate of Oman. *The Journal of Oman Studies* 20: 78-111.
- Thornton, C. P. and C. M. Cable 2016 Introduction. In C. P. Thornton, C. M. Cable and G. Possehl (eds.), *The Bronze Age Towers at Bat, Sultanate of Oman. Research by the Bat Archaeological Project, 2007-12*, 1-11. Philadelphia [PA], University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Al-Tikriti, W. Y. 1989a Umm an-Nar Culture in the Northern Emirates: Third Millennium BC Tombs at Ajman. *Archaeology in the United Arab Emirates* 5: 89-99.
- Al-Tikriti, W. Y. 1989b The Excavations at Bidya, Fujairah: The 3rd and 2nd Millennia B.C. Culture. *Archaeology in the United Arab Emirates* 5: 101-114.
- Al-Tikriti, W. Y. 2022 *Qidfa' 1: Excavation of a Late Prehistoric Tomb, Fujairah Emirate, United Arab Emirates*. Oxford, Archaeopress.
- Tosi, M. and T. Saccone 2017 *Sinaw 2014 Area 1 Grave 46*. <http://www.osculture.org/oman/index.php/grave-46>. (2020 年 10 月 6 日閲覧)
- Uerpmann, M., H.-P. Uerpmann and S. A. Jasim 2018 Report on the 2015/16 Season of Excavations at the Site HLO1 in the Wadi al-Hilo (Emirate of Sharjah, UAE). *Annual Sharjah Archaeology* 15: 108-112.
- Velde, C. 2003 Wadi Suq and Late Bronze Age in the Oman Peninsula. In D. T. Potts, H. Al Naboodah and P. Hellyer (eds.), *Archaeology of the United Arab Emirates: Proceedings of the First International Conference on the Archaeology of the U.A.E.*, 102-113. London, Trident Press Ltd.
- Velde, C. 2009 The Landscape of the Middle Bronze Age in the UAE - Where Did People Live? In National Center for Documentation & Research (ed.), *Proceedings of the International History Conference on New Perspectives on Recording UAE History*, 61-74. Abu Dhabi, National Center for Documentation & Research.
- Vogt, B. 1985 *Zur Chronologie und Entwicklung der Gräber des späten 4.-2. Jtsd. v.Chr. auf der Halbinsel Oman: Zusammenfassung, Analyse und Würdigung publizierter wie auch unveröffentlichter Grabungsergebnisse*. Ph.D. dissertation. Göttingen, Universität zu Göttingen.
- Vogt, B. 1994 *Asimah: An Account of a Two Months Rescue Excavation in the Mountains of Ras al-Khaimah, United Arab Emirates*. Dubai, Shell Markets Middle East.
- Vogt, B. 1998 State, Problems and Perspectives of Second Millennium B.C., Funerary Studies in the Emirate of Ras al-Khaimah (U.A.E.). In D. T. Potts (ed.), *Arabia and Her Neighbours. Essays on Prehistorical and Historical Developments Presented in Honour of Beatrice de Cardi*, 273-290. Turnhout, Brepols.
- Vogt, B. and U. Franke-Vogt 1987 *Shimal 1985/1986. Excavations of the German Archaeological Mission in Ras Al-Khaimah, U.A.E. A Preliminary Report*. Berlin, Dietrich Reimer Verlag.
- Weisgerber, G. 1981 Mehr als Kupfer in Oman. Ergebnisse der Expedition 1981. *Der Anschnitt* 33: 174-263.
- Weisgerber, G. and A. A. B. Al-Shanfari 2013 *Archaeology in the Arabian Sea. Masirah and Al Hallaniyyat Islands*. Muscat, Ministry of Heritage and Culture.
- Williams, K. D., N. S. Al-Jahwari and K. A. Douglas 2021 Preliminary Analyses of the Bronze Age and Post-Bronze Age Mortuary Monuments at the Dahwa Sites, North Batinah Coast, Sultanate of Oman. *East and West. New Series* 2(2): 27-42.
- Williams, K. D. and L. A. Gregoricka 2016 Excavations of the Wadi Suq Tombs at Tower 1156. In C. P. Thornton, C. M. Cable and G. L. Possehl (eds.), *The Bronze Age Towers at Bat, Sultanate of Oman. Research by the Bat Archaeological Project 2007-12*, 303-308. Philadelphia [PA], University of

- Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Yule, P. A. 2001 *Die Gräberfelder in Samad al Shān (Sultanat Oman): Materialien zu einer Kulturgeschichte*. Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
- Yule, P. A. and G. Weisgerber 1996 Die 14. Deutsche Archäologische Oman-Expedition 1995. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft* 128: 135-155.
- Yule, P. A. and G. Weisgerber 2015a Al-Wāsit Tomb W1 and other Sites: Redefining the Second Millennium BCE Chronology in South Eastern Arabia. In P. A. Yule (ed.), *Archaeological Research in the Sultanate of Oman. Bronze and Iron Age Graveyards*, 9-108. Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
- Yule, P. A. and G. Weisgerber 2015b The Cemetery at al-Akhḍar near Samad al-Shān in the Sharqiya (Oman). In P. A. Yule (ed.), *Archaeological Research in the Sultanate of Oman. Bronze and Iron Age Graveyards*, 111-178. Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
- Yule, P. A., G. Weisgerber, M. Kunter and M. Bemann 1993 Wādī Sūq Burial Structures in the Sultanate of Oman. *Nubica* 3: 379-415.
- 黒沼太一 2022 『南東アラビア 青銅器—前期鉄器時代遺跡分布図』 <https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1lPfse4fHhEgkhhXxOzQOjU2eI9vaY5u2&usp=sharing> (2022年10月31日閲覧)
- 黒沼太一・三木健裕・中島シャルロット＝アン・近藤康久 2021 「紀元前2千年紀前半の南東アラビアーワーディー・スーク文化期研究の現状と課題」『西アジア考古学』第22号 143-163頁。
- 後藤 健 2014 「アラビア古代湾岸文明の「王墓」」『アジア考古学四学会(編)『アジアの王墓』161-189頁 高志書院。

